

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

小正月のつくりもの(三)

——利根編——

序 文

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後を小正月と呼び、古くから豊作祈願のための予祝行事が集中しております。

「小正月のつくりもの」はその典型的な事例で、ニワトコ・ミズブサ・ヌルデ等の木で製作したケズリバナ・栗穂穂・ハラミ箸・カユカキ棒・農具等を供え、また、マユダマを作って座敷等に飾ります。

しかし、このような「つくりもの」も産業構造の推移に伴う日常生活の大きな変化により次第に姿を消しています。また、この動きは都市化の進む平野部だけでなく、農山村部にも広がっております。そこで、この貴重な無形の民俗文化財を記録保存し、広く県民一般の方々に紹介して後世に継承したい、というのが本調査の目的です。

本書は昭和六十年から始まった五年計画の第三年次の調査として、昭和六十二年に行った利根地方の「つくりもの」調査の報告書です。この地方は従来の民俗行事が比較的そのまま伝承されており、地域の特徴がよく現れたものとなっております。

今日、このような伝統的な製作技術を継承する後継者の減少は著しく、本書の刊行を契機にして、「つくりもの」を初めとする無形文化財の保護と継承に少しでも役立てていただけますことを切望します。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり、調査員の各先生方はもとより、関係市町村教育委員会を初めとする数多くの方々にご協力をいただきました。特に、御多忙中にもかかわらず、快く調査に御協力いただきました調査対象者の皆様に対しまして、深甚なる謝意を表す次第であります。

平成元年三月

群馬県教育委員会教育長 千吉良

覚

目次

序文	1	頁
目次	1	頁
無形文化財緊急調査実施要綱	1	頁
△総論▽		
利根地方の「小正月のつくりもの」		
一、はじめに	4	
二、利根地方のつくりものの特徴	5	
三、その他の行事	7	
△各論▽		
戸部 一家の「つくりもの」		
一、概観	9	
二、山入り	9	
三、ものつくり	10	
四、お飾りかえ	12	
五、道祖神とドンド焼	12	
六、十五日粥	12	
七、マユカキと片づけ	13	
田中長重家の「つくりもの」		
一、概観	14	
二、山入り	14	
三、ハナカキ	14	
四、お飾りかえ	16	
五、小正月行事との関わり	17	
山田 勝家の「つくりもの」		
一、概観	19	
二、山入り	19	
三、木の種類	19	
四、作る日・場所・道具	20	
五、作り方	20	
六、飾りかえ・供え方	21	
七、小正月の行事とのかかわり	22	
中沢信英家の「つくりもの」		
一、概観	23	
二、山入り	23	
三、木の種類	24	
四、作る日・場所・道具	25	
五、作り方	25	
六、飾りかえ・供え方	26	
七、小正月の行事とのかかわり	27	
富岡利雄・英吉家の「つくりもの」		
一、概観	28	
二、山入り	29	
三、木の種類	29	
四、作る日・場所・道具	30	
五、作り方	30	
六、飾りかえ・供え方	31	
七、小正月行事とのかかわり	33	
高山岩造家の「つくりもの」		
一、概観	34	

二、山入り……………	34
三、ハナカキ……………	34
四、お飾りかえ……………	36
五、小正月行事とのかかわり……………	36
六、おわりに……………	38
梅沢千代松家の「つくりもの」	
一、概観……………	39
二、山入り(山始め)……………	39
三、ハナカキ……………	39
四、お飾りかえ……………	41
五、小正月行事との関わり……………	42
高山茂男家の「つくりもの」	
一、概観……………	44
二、山入り……………	44
三、ハナカキ……………	44
四、お飾りかえ……………	46
五、小正月行事とのかかわり……………	47
六、おわりに……………	48
関登志雄家の「つくりもの」	
一、概観……………	49
二、山入り……………	49
三、ものづくり……………	49
四、お飾りかえ……………	51
五、年とり(十四日年)……………	52
六、道祖神とドンド焼……………	52

七、十五日粥……………	52
八、マユカキと片づけ……………	52
九、その他……………	53
星野 甲家の「つくりもの」	
一、概観……………	54
二、山入り……………	54
三、ものづくり……………	54
四、お飾りかえ……………	55
五、道祖神とドンド焼……………	56
六、マユダマカキと片づけ……………	56
七、糞蚕とつくりもの……………	56
八、その他……………	56
九、まとめ……………	57
石井周二家の「つくりもの」	
一、概観……………	58
二、山入り……………	58
三、木の種類……………	59
四、作る日・場所・道具……………	59
五、作り方……………	60
六、飾りかえ・供え方……………	61
七、小正月行事との関わり……………	62
田村秀夫家の「つくりもの」	
一、概観……………	65
二、山入り……………	65
三、木の種類……………	66

四、作る日・場所・道具……………66頁

五、作り方……………66

六、飾りかえ・供え方……………67

七、小正月行事との関わり……………70

山田利治家の「つくりもの」

一、概観……………72

二、山入り……………72

三、木の種類……………73

四、作る日・場所・道具……………73

五、作り方……………73

六、飾りかえ・供え方……………74

七、小正月の行事との関わり……………75

阿部隆家の「つくりもの」

一、概観……………78

二、山入り……………78

三、木の種類……………79

四、作る日・場所・道具……………79

五、作り方……………80

六、飾りかえ・供え方……………81

七、小正月の行事との関わり……………83

原沢一郎家の「つくりもの」

一、概観……………85

二、ワカキムカエ……………85

三、ものづくり……………85

四、カザリカエ……………87

五、小正月との関わり……………88頁

富沢佳年家の「つくりもの」

一、概観……………90

二、山入り……………90

三、ハナカキ……………90

四、マユダマ……………91

五、カザリカエ……………93

六、小正月行事との関わり……………94

本多憲作家の「つくりもの」

一、概観……………96

二、ワカキ……………96

三、ハナカキ……………96

四、カザリカエ……………98

五、小正月行事との関わり……………98

六、その他……………99

林幸男家の「つくりもの」

一、概観……………101

二、山入り……………101

三、木の種類……………102

四、作る日・場所・道具……………102

五、飾りかえ……………103

六、道祖神とドンドン焼き……………103

七、マユダマカキと片づけ……………103

八、小正月行事とのかわり……………104

九、その他……………104

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 趣 旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しようとしている。

そこで、特に重要なもので、緊急に保存対策を講じなければならぬ無形の文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

「小正月のつくりもの」

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後の小正月には古くから豊作祈願の一方法としての豊作予祝行事が集まっている。その一つとして小正月のモノツクリの行事がある。小正月を迎えるにあたってものつくりをして飾りかえを行うこの行事は、地域によって「ものつくり」・「かざりかえ」など様々な名称で呼ばれ、実際につくられるものの種類も豊富である。

マユダマ(メーダマ)・ケズリバナは「つくりもの」の代表的事例であるが、その他にも栗穂神懸(アホヒゴ)、俵・農道具一式・木刀類、ドウロタジ(道陸神)をはじめとする各種木像類、カヌカキ棒、ハラミバシなどの製作が知られ、それらの地域的特色も著しい。

これらの製品は庶民の生活と密接なかかわりをもちながら今日まで人々に親しまれてきた。しかし近年ではこれらを製作する人々は減少し、作品の量も種類も少くなっている。そこで、現在残っている製作技術を中心に、事例(特定の個人の家)ごとに、「小正月のつくりもの」全般にわたって調査する。

3. 調査主体者 群馬県教育委員会

4. 調査計画

(1) 調査期間

昭和六十年年度より平成元年度までの五年計画(従来の四年計画を一年延長)

(2) 調査地域

県下全域を次の五地域に分割して各年次ごとに行う。

- 。昭和六十年年度(第一年次) 吾妻地方
- 。昭和六十一年度(第二年次) 西毛地方
- 。昭和六十二年度(第三年次) 利根地方
- 。昭和六十三年度(第四年次) 中東毛地方I
- 。平成元年度(第五年次) 中東毛地方II、補充調査

※ 詳細は別掲地図を参照

(3) 調査員(昭和六十二年度)

阪本英一 県立図書館主任専門員

阿部 孝 前新治村立入須小学校長

奈良秀重 中之条町文化財調査専門委員

神宮善彦 県立歴史博物館主任

井野修二 前樺市教育委員会文化財保護室主任

(4) 調査対象者 (昭和六十二年度)

。沼田市

戸部 一 (沼田市佐山一九二〇)

田中長重 (沼田市川田五九四)

。白沢村

山田 勝 (利根郡白沢村尾合七八六)

。利根村

中沢信英 (利根郡利根村穴原五三三)

富岡利雄 (利根郡利根村團原八三五)

。片品村

高山岩造 (利根郡片品村土出一九九〇)

梅沢千代松 (利根郡片品村新井一〇七)

高山茂男 (利根郡片品村花咲二〇三三)

。川場村

関登志雄 (利根郡川場村谷地一一二四)

星野 甲 (利根郡川場村木賊一九三八)

。月夜野町

石井周二 (利根郡月夜野町吉平三三三三)

田村勝信 (利根郡月夜野町小川三九三〇)

。水上町

山田利治 (利根郡水上町寺間三四八)

阿部 隆 (利根郡水上町栗沢二五八)

。新治村

原沢一郎 (利根郡新治村羽場八九六)

富沢佳年 (利根郡新治村入須川一一〇七)

本多憲作 (利根郡新治村東峰須川六六)

。昭和村

林 幸男 (利根郡昭和村生越乙七二六)

5. 調査内容

(1) 特定個人の家ごとに「小正月のつくりもの」すべてにわたって、その種類・技術・特色などについて調査する。

(2) 伝統と製作技術の継承

6. まとめ

(1) 調査資料・図面・写真などの作成・保存

(2) 各年次ごとに調査報告書『小正月のつくりもの』を発行

する。

利根地方の「小正月のつくりもの」

一、はじめに

利根郡は、群馬県の北部に位置し、赤城山と子持山の二つの火山で南の県中央部、ひいては首都圏とへだてられている。北は谷川岳など上越の山々で越後（新潟県）や会津（福島県）と境して、利根川本流・支流の赤谷川・片品川の三つの川筋と、沼田盆地に人々の生活舞台があり、全体に高地であること、日本海側からの冬の季節風の影響から雪国の風があり、冬が長く、春はおそいが一度に來る、秋が早いなど、群馬県内でも特色ある地域で、利根文化圏といえるものを形づくっている。

〔一〕 西入りー赤谷川流域

利根郡西部は赤谷川流域にあたり、そのほとんどが新治村で、月夜野町の一部も含んでいる。ニワトコの十六バナのほかのハナは、オツカドやタルミの木を削ッ割りにしてケズリをつけたものがある。十六マイダマのほかに「桑の葉」といわれるキリ餅一六枚をミズブサ（ミズキ）の枝にさしたものがあがるが、三例ともかなりのちがいがあがる。

〔二〕 利根入りー利根川本流域

利根川入りは利根川本流の最上流部にあたり月夜野町・水上町が中心になる。この地域はつくりものの伝承がつかみにくいが、水上町ではタルミの木をハナ木に使ったり、ドッコイボウと称する木刀もある。オツカドは「仏の木」といっていやがる事（竹がないので葬式の時、棺つきが使う杖にオツカドを使うといわれた）がある。

〔三〕 東入りー片品川流域

片品村、利根村、昭和村で福俵を飾る例が多いがミズキで作る。ハナは小刀を使って向うへ削るようにして作る独特のもので、吾妻郡でみられるようなホダレであるが、チチレ



が粗く、また、数本のチヂレで切りとって使用したり、アカボヤの小枝にさしたマユダマに直接さして（植えこんだようになる）飾るほか、クルミの長い枝に一六本植えこんで十六バナを作る例もある。

二、利根地方のつくりものの特色

(一) ハナの材料

ハナギは、全般的にミズブサ（ミズキ）が多く、それに次いでクルミが多い。どちらも利根郡内には多く自生、又は栽培されているものである。ニワトコも長いものに使われるので、かつては各家の屋敷うちに何株か植えられていたものである。オッカド（ヌルヂ）の例は少い。

(二) 福俵

年神棚（神棚）かえびす様に上げられる。アワ俵・ヒエ俵というのはみられず、ミズキを六本、適当な長さで切り、麻なわでしばってから木口に「大・福神」とか「米・大麦・小麦・大豆・粟・稗」などと文字を書くが、一般的でない。

(三) コニエワ（肥庭）かざり

ほぼ全域にあったとみられるが、現在は少い。新治村や沼田市川田地区では、竹を用いているが、他地区ではアカボヤ（ミズキ）の枝に木をさしたり、片品村の例のようにマユダマをさし、マユダマにチヂレをさして飾る例もみられる。県内の他地域のアワボ・ヒエボと同じものであろうが、特色あるものといえよう。

四 ハナ

十六バナは、ニワトコの長いものを使って十六段のハナにするが、ハナはつけずに枝を2本半紙で包み、水引きをかけて上げるだけの家もみられる。一段のものは、大きいのは年神様などの家の中へ上げ、小さいものはタバリバナとして家の外の神仏に上げられる。特にクルミやオッカドを二つ割り、又は四つ割りにして、そのカドにケズリを数本入れたハナも多くみられるのもこの地方の特色であ



る。また片品村のチヂレ、ノシは、ハナカキナタを使用せず、小刀を使うことと、他地域が刃物を手前に引いてハナカキをするのに対して、小刀をハナ木に押しつけて向うへ押しつづけてチヂレを作る。当事者たちは「手前へ引くやり方は誰にでもできる。向うへ押すのは器用な人でなければやれないのだ」といつているくらいである。

(四) 木刀

木刀は水上町でみられ、「ドッコイ」又は「ドッコイ棒」とよばれ、男の子の数だけ作る。クルミの木で、ツバ(木を輪切りにして中をくりぬく)をつけ、刀身の部分の皮をむく。ドンドンヤキで先の方をこがして来て、草ぶき屋根の屋根裏にさしておく。他地区では見られないようである。道祖神に供えることはまったくない。

(四) カユカキ棒・ハラミ箸

カユカキ棒はほぼ全域にみられるが、片品村土出の高山・梅沢両家では作っていない家が多く、それが昔からの家例だったのかどうかはわからない。

(四) 農具

利根郡内では、農具のミニチュアを作る事例は一例もみられない。これは近年だけでなく、昔から伝承されていないことが、利根郡で、新治村の施設に展示されているものは、利根の本来のものでなく、吾妻郡から学んで来た人の創作であることは特記しておきたい。

(四) マユダマ

マイダマとかダンゴとかいって、小正月をダンゴ正月ということが一部にみられるが、米の粉だけでなく、アワ・ヒエなどの粉を、ワカビキとよんで七草すぎに石臼で挽いて用意し、十三日につくって飾る。一般には丸いが、十六マイダマは大きなマユ形のもの一六個(中に小豆の煮たものを一粒ずつ入れる)を、桑の木、又は門松に使用した笹竹にさしてオシラ様に上げる。蛭神に供えるわけです。新治村の本多家では、笹竹に十六マイダマをさした他に、桑の木にノシ餅の切ったものを一六枚さして「桑の葉」としてオシラ様に上げる。糞蚕にかけた願いが示されているよう。オシラマチと称する行事は小正月にはなく、二月初年の時に行われている。

(四) セッチンビナ

便所に神の存在を認め、便所神を信仰することは県下全域にみられ、便所の中にヤリハギ(幣束)を祀るのは珍しくないが、利根郡

内では片品村、利根村、沼田市、月夜野町、新治村の各地で、セッチンベーナ（セッチンベーナ、オヘーナ、セッチンヨメゴなどともいふ）とよぶ人形が小正月に作られ、便所に飾られていて、県内ばかりでなく、全国的にも珍しいものである。

片品村土出では、便所の中に木箱を作り、この中に木彫りの「便所神様」が祀られている家が何軒かみられる。これは小正月とは関係がないが、明王像でアマンジャクを踏まえている。セッチンヨメゴは、多くは正月十四日に作られた。作るのは女性で半紙などで作る。ベーナの髪は著に紙を巻きつけて、婚どんはちよんまげに、ヨメゴは丸まげに結ったりして作る。セッチンベーナがでなければ嫁さんにならない。できればどこへでも嫁に行ってもよいといったという。多くは十四日夜作って十五日朝、便所の壁にはりつけて祀った。男女一組というのがきまりで、正月様の余り紙で作るが、トウモロコシの皮をとっておいて作り、髪はトウモロコシの毛で作るといふこともある。色紙で作ることもあって、（正月二日に作ることや、二月の節分に作る例もある）飾る。一年中貼っておき、糞づまり（便疑）の時にはオガンシヨをかけ、通じると赤飯をふかして供えるともいふ。セッチンヨメゴを作って祀ると、腰から下の病にかからないとか、お産が軽いともいわれる。きりょうが悪い人のことを「セッチンヨメゴのようだ」ともいった。

子どもが生まれると、三日目又は七日目にオサゴを持ってオヒガミ様参り（便所参り）をさせたが、子どもが丈夫に育つという。

三、その他の行事との関わり

〔一〕 ドンドン焼きと厄落し

十四日の夕方、各地でドンドン焼きが行われるが、片品村ではオオヤ（大）とセッチン（小）の二つの小屋を作り、セッチンから燃やす。この日ドウロク（道祖）神に来る時、厄年の人は身につけているもの（女性はタシ、男性はフンドシ等）を辻の所に捨てて来る。四二才の男性は「フグリ落とし」といって六尺ふんどしを置いて来たという。もちろんそれを拾うのはいやがる。お金を年の数だけ置いて来る所もあるし、火の中へ投げこむ例もある。これを拾うと家へは持ちこまず、その日のうちに使うことになっている。またドンドン焼きの終わったあと、近所の人や知人を家に招いて、すし・ようかん・酒（女性の場合は甘酒）で、厄落としをしてもらう。他町村では厄年の人がみかんを投げたりして厄落としするが、振舞酒の例は少ない。水上町ではドコイ棒をこがす地区があるが、木刀が一般的ではないのでではみられない。

〔二〕 センビキガユ

十六日に、麦・稗・豆等を煮てワラのツトッコにのせて三本辻に出す行事があつて、勢多郡西部と共通のもので、盆の十六日とも関連がある。新治村の布施ではツトッコを出さずに、オソウセン様（馬の神）に上げるとして、めしとケンチン汁などで醸立てして、馬小屋の前に供え、ロウソクを立てている。馬の肥をとるのもこの日ということから、馬に関係する行事といえよう。

□ オシラマチ

利根郡でのオシラマチは、2月初午の前日、己の日の夜で、マユダマを作つて、一升ますの中にたわらを敷いた上にのせて、オシラ様（蚕神）に供える。マブシツバといつてそばをつくつて供える例もある。

初午の朝、正月のお松をいぶすと、その煙に乗つてオシラ様が下りて来られるという。（帰られるともいう。帰るといふ例では、小正月に来られて、二月初午に帰るといっている）供えたマユダマを食べる時は、シ・ウユをつけると蚕がタレコ（軟化病）になるといふ、お茶を飲むとマユがさびるともいふ。何れも蚕作が悪くなるというわけである。

戸部一家のつくりもの

一、概観

戸部家は、沼田市佐山町にある。つくりものはほとんどの家で自分の手で作ったが、チヂレは、奈良町大倉の人が売りにきたものを買って飾った。今大倉町には作る人はいない。

物資のない時代に自産するようになり、今は小正月ではマユ玉だけになっている。作らなくなって久しいため、昔を思い出して作っていたのだ。

二、山入り

正月二日に山に入って、つくりものの木を切ってきた。

佐山の中で普段歩いて見つけておいた木を切ってくる。小正月の木はどここの山に入って切ってもかまわなかった。

正月の木も同じだが、松の幹を松林から切ってくる人もあって、自産するようになった。

暦を見て歳徳神のいる良い方向を見て山に行く。方向のいい方を見て切り始める。

鏡もちを切ったものを供え、手をあわせてから切り始めた。

ノコギリとナタを使い、ニワトコ、オッカド、ヤマタワ、ミズブサを切ってきた。ヤマタワ、ミズブサは、十一月頃切り日陰干しをしておいた。

山からは、かっいでくるのだが、三十七い八本にもなった。

家を持ってきてからは、きれいな所に置いておいた。

ヤマタワはマユ玉の親木、オッカドで十五日粥のカユカキ棒とハラミバシ、ミズブサでハナ、オシラ様のマユ玉の木はニワトコ、アワボヒエボはオッカドで作る。

三、ものづくり

ものづくりは正月中の十三日までの間でやった。十三日にはマユ玉をつくり、もちをついた。十三日から小正月になるからその日までに作った。

お勝手にハナカキナタを使って作った。台はマキでも何でもよく、作ったものは、きたなくない所に、適当な入れ物に入れて置いておいた。

ハナは一段と十六段のものがある。一段バナはミズブサで作り、キタ・ツル・カメの三種類がある。△写真1▽十六段は長いニワトコの木の本に八段のハナをかき、二本をよせて半紙でくるみ水引でしばったものである。これはオシラサマ用という。

カニカキ棒は、オツカドの木をナタで削って作る。削りが入るとがらせない方を四ッ割にするが、何もはさまない△写真2▽ハシはオツカドの木を割って作る。両端を細くけずり、中央をふ



(写真 1)



(写真 4)



(写真 2)



(写真 3)

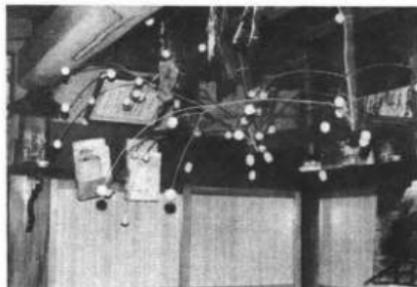


の土地を活かす西武の土地

(写真 5)



(写真 6)



(写真 8)

くらませた形にした。家族の数だけ作った。ナタを使って作った(写真3・4)。
 アワボ・ヒエボは竹にオッカドの木にハナをかけたものをつけた。全部む
 いてハナをかけたものはアワで八つ、むかないでハナをかけたものがヒエで、
 これも八つで、計十六作ってさした。(写真5・6・7)。
 福俵、木刀、農具は作らない。
 マユ玉は、割れたような米をひいて作る。こねてふかしてから水をかけて
 ひやすと、外側が白く光って見えた。(写真8)。
 粉は手のあいている時にひいておき、十三日に作った。オシラ様はマユ形
 のものを十六、他は丸形で同じ大きさだった。ヤマタワとニワトコの木を使
 った。オシラ様はヤマタワ、ザシキに飾るものはニワトコを使った。



(写真 7)

四、お飾りかえ

飾りかえは十四日朝である。雑煮を進ぜたあと、門松、正月だなをはずして、ドンド焼へ持っていった。夕方ドンド焼をした。

ハナは一段のものを、神だな、年神だな、仏壇、えびす様、釜神様、井戸神、神社、お堂、オシラ様、山の神、屋敷稲荷にそなえた。お宮などには、三社参りといって石宮などに進せてまわった。

墓地には供えないが、正月前にコジツコメをそなえた。

マユ玉はふかし、水をかけてひやしたあと固くならないうちにさした。特別な入れ物はない。

キタバナ、ツルバナ、カメバナを一箱につけておく。

オシラ様へは、マユの形のを十六個つくり、ヤマクワの木にさした。ニワトコの木を二本、各々八段ハナをかけたものもあげた。アワボ・ヒエボは堆肥場に立てた。特に何様にそなえるとはいわれないが、百姓のお祭りだといった。

五、道祖神とドンド焼

十四日の夕方、大正月の飾りなどをやした。これは厄おとしといい、厄年の人が、お金を紙につつんで火の中に投げ入れたり、みかんを配った。この時のお金は一匁に計算して入れた。このお金は家に持って帰ってはいけない、すぐ使うものだといわれた。また、みかん箱も縁起が悪いといって持って帰らなかった。

もえさしをひろってきて、屋根にさしておくと、防火になるといった。

この火でもちをやいて食べるとかぜをひかないという。このもちは、門松の横竹を持って行って、さして焼いた。

六、十五日粥

カユカキ棒でかきまぜた。使ったあと神だなにあげておき、苗代作りの時水口に立てておき、間を水が流れるようにした。特に唱え言はない。

七、マユカキと片づけ

一月二十日のエビス講の日にマユカキをした。適当な入れ物にマユ玉を入れておいた。

おたなもかたづけた。

小正月の供えもの、飾りものも二十日にかたづけた。もやしたり、初午の日にいぶしたりした。

ハシは、十文字にワラでしばり、塩の上に立てると、塩がしけないという。

八、まとめ

つくりものを作らなくなって、時間がたっているため、やや記憶がうすれた点も見られる。

調査のために作っていただいたもので、これ以上の継承はむずかしいように思われる。

(井野修二)

田中長重家の小正月つくりもの

一、概観

田中家は、利根川の右岸、子持山の北麓に位置する農家で、ハナは一段と二段のもので十六段のものはみられない。カユカキ棒、ハラミ箸や肥庭かざりなど作るが、福俵や農道具、カタナは作ったことなく、南に隣接する高山村中山で確認されている道祖神の木像はみられない。ドンドン焼きもみられないが、オシラマチはやっており、十六マイダマも桑の株にさしてオシラ様（蚤神）へ供えている。十五日粥はカユカキ棒でかきまわしてから、後で苗代つくりの時に水口に立てている。

二、山入り

山入り（山始め）は一月二日、お供えの餅を持って子持山の方へ行き、木を切る前に十二様（山の神）に供えて拜んでから切る。切り方は、その年のエトの方向（今年は辰の方）を向かないようにして切り、肩に担いで運んで来る。木はミズブサ（ミズキ）、ニワトコ、オツカドで、桑畑から桑も切ってくる。屋敷稲荷の所へ置くが、雪の時は物置の所に置くこともある。供えものはしない。

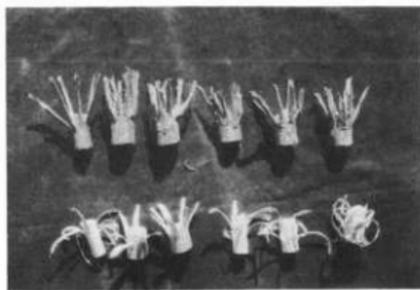
三、ハナカキ

小正月のつくりものを作ることをハナカキとよび、七日頃のいい日を暦で見、物置き前の隅あたりのいい所でやる。道具は鋸、なた、ハナカキナタで、台はその時の気分で何でも使うが、柱の切れ端または薪の割ったものが多い。作ったものも特別のものに入れることもなく、つくりものも正月棚に上げておく。

（一）ハナ

ハナは、二段のものは大きく、小さいものは一段にする。△写真9▽ 作り方はミズブサの皮をむき、ハナカキナタで手前の方へ引いて、チヂレルようにかき、二段に仕上げる。

（写真 9）



一段のものも同じ要領で一段に作る。△写真10▽

□ カユカキ棒

カユカキ棒は、オツカド(ヌルデ)の木の直径5/6cm、長さ約20cmほどのものを皮をむき、元の方にハナを一周するようにかき末をとがらせ、元の方を十字に割れめをつける。△写真11▽

□ ハラミ箸

ハラミ箸は、オツカドの木を割って皮をむき、長さ約十五センチメートルほどに切り、元、先の両方を細く削って、中央部が太くふくらんだものを作る。△写真12▽ 数は家族数分の外に一本余分多く作る。これは「ハシ(半端、端数のこと)」になるように作るという。

四 コエニワカザリ

コエニワカザリは、十三日に、笹竹の芯つきのものに、オツカドの太さ三センチメートルぐらい、長さ五センチ

メートルぐらいのものを切り、皮をむかないもの六本(棒)、皮をむいたもの六本(葉)を、それぞれハナをかき(一周するようにハナをかき)、竹にまばらなるようにしてさして仕上げる。

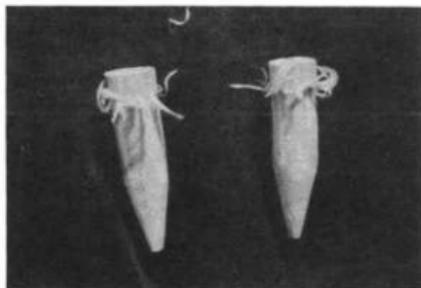
福俵、木刀、農道具は



(写真10)



(写真12)



(写真11)

作ったことはない。

(四) マユダマ

オマイダマ(マユダマ)の粉は米の粉で、七日頃のいい日を見て粉挽きをして用意し、まるめるのは十三日、神棚や座敷、仏様、他の神のマユダマは小形で丸く作り、オンラ様(蛭神)のものはマユ形にして大きくつくるので、十六マイダマという。マユダマはシウギに入れて、ミズブサ、ヤマクワ、桑の木にさす。

四、お飾りかえ

カザリカエの日は十三日、ハナは、二段の大きい二段のものを年神棚の両端に一本ずつ上げる。(写真13)



(写真13)



(写真14)

(写真15)



(写真16)

仏様、えびす様、釜神、井戸神、オシラ様には小さい一段のものを一本ずつ、△写真14・15▽屋敷稲荷には二本上げる。△写真16▽墓地やお堂、道祖神などへ上げることはない。

肥庭かざりはコイニワ（肥庭・堆肥）の上に立てる。地神様とよぶ百姓の神様に上げるものといわれる。

マユダマは、年神様、神棚へは、ミズブサの枝になるべく数多くさして、棚の両わきへ結びつけて上げる。

オシラ様へは、十六マイダマを桑の株にさしたものを、ザシキの柱に結びつけて飾る。△写真17▽数は十六というが実際には十八個さすが、これは綱がうんととれるようにということである。桑の木について特別の話はない。

五、小正月の行事と係わり

(一) オシラマチ

十四日夜、そばをつくり、小さい重箱にミツケ（ミチンボともいうが、そばの小さくまるめたものをヒトチンボという）入れて床の間に供える。このそばは女性が食べる。十四日の夜は桑の根っこを切ってきておいて、十五日粥の小豆を煮ながらその桑の根っこをいぶす。白髪にならないようにという。

(二) ドンドンヤキ

ここではドンドン焼きをやっていない。

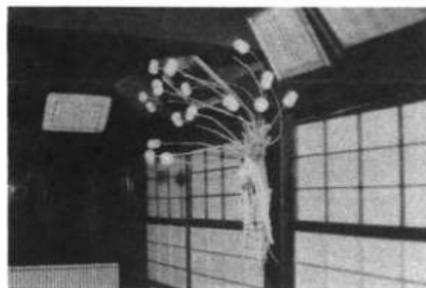
(三) 十五日粥

十五日朝、十五日粥とよぶ小豆粥をつくり、煮えたところで、カユカキ棒の十文字の割れめにマユダマをカイバツラとしてはさみ、その方で小豆粥の鍋（釜）の中を「の」の字にかきまわして、神棚に上げておく。粥はハラミ箸で食べる。

(四) カユカキ

マユダマをとるのは十九日、ショウギの中にかきとって入れる。この日に小正月の飾りものは全部片ずける。

(五) セツチンヨメゴ



(写真17)

オヘーナとかセッチシロメゴとよぶ人形を作って便所に飾るのは十四日、人形は紙で男と女の一組の人形である。

六 ハナなどの始末

ハナはまとめてとっておき、春蚕の上簇の時、最初の熟蚕をこれに上げて豊蚕を祈る。

カユカキ棒は、稲のナエマ（苗代）をつくった時に水口に立て、その上に「トリノクチ」といって、米と大豆をホウロクで炒ったものを半紙でオヒネリに包んだものを割れめにはさんでおいた。ハラミ箸も田の水口にさしておいた。

正月期のマユダマはとっておき、味噌をツッコム（仕込む）時に、樽の中に散らすように入れる。こうすると神様が一年中守ってくれるという。

正月の松とミズブサの木は初午のマユダマをゆでる時に燃すことにしている。

（奈良 秀重）

山田勝家のつくりもの

一、概観

山田家は利根川の支流、片品川の北岸の河岸台地であり、この集落、尾合（白沢村）は沼田台地が延びたその麓にあり下郷と呼び、台地上を上郷を称していた。下郷は気候には比較的恵まれて「上郷・下郷は着物一枚ちがう」といわれ利根沼田の中で桜の開花が一番早い。集落の中心に東西には県道沼田大間々線が通っている。△写真18▽戸数は約百三十戸、人口は四百人を数え、ほとんどが専業、兼業の農業関係である。ここの特産は尾合柿で、昔は有名であった。現在はこんにゃく、トマト、イチゴなどのハウス栽培が盛んであり、大工場もある。

氏神は武尊神社で奇祭のヤァヤァ取りで知られている。寺は浄土宗の寺がある。

かつては年中行事も伝統があったらしいが、県の民俗調査（昭和四十三年）の結果でも判明したようにある年代に大部分の貴重な習俗が消えたようであった。今回も、そのことを強く感じた。

二、山入り

昔の山入りは正月二日と決っていたが、現在は十日か、十一日に行なうようになった。

持っていくものはノコ・ナタとお供えする切り餅を半紙に包んで行く。この供えものの供え方は包んで行った半紙を手で、ご幣状のものを作り、木に結びつけ、その木の根元に切餅を二個おいて、おがんだ。

迎える山の方向は決っていない。木の種類はミズブサ、オツカド、ヤマタワの木で、担いで家に帰り、不浄でない日蔭においた。塩で清めるとか、洗米を供えることなど一さいない。

三、木の種類

ハナに使う木はニワトコの木、この木は家敷内にあるものを使用し、蛭神に供えるもの



（写真18）

である。つくりものをする木はオツカドの木を使う。マユ玉をさす木はヤマクワ、ミズブサの木を使い、オシラ様には桑畑にあるクワの木であった。

昔はハナの木はザンザラという木を使ったという。

四、作る日・場所・道具

小正月のつくりものは正月十三日までに作る事になっていた。ただ、「一夜飾りはするものではない」といわれていた。作る場所は昔は決っていたらしいが、現在は特に決めていない。かつては一年の仕事のリズムが決っていたのでよかったが、現在は盆正月の区別、昼夜の区別なく働かなければならないので行事を気にしなくなった。

道具は昔はノコ、ハナカキナタを使ったというが、現在は適当に間に合せの道具である。

作ったものは、おぼんに入れ、床の間、または神棚に置くようにしている。△写真19▽

五、作り方

ハナは昔は固く作っていたが最近ほとんど作らないようになった。本年は特に作った。但し、一段のハナのみであった。

カユカキ棒はハナを上部につけ、切り口に十文字の切り込みをつける。その十文字の中心にマユ玉をさす。この棒は長さ二十三センチメートル直径三センチメートルのものを二本作る。

ハラミ箸は長さ約二十一センチメートル、中央部分の太いところで直径一センチメートル位のものを家族の人数分と門松、△写真20▽ 神棚、屋敷種荷用として一組作る。

はしははしを作るという事は聞いていない。(一組でなく一本のこと)△写真21▽

農具、木刀、福俵は昔から作らなかつた。ただ、ハナでも昔はノシバナ、チヂレバナを作った話は残っている。同じく、アワボ、ヒエボもオツカドの木を使って作っていたとい



(写真19)

う。

マユ玉の米の粉は大正月すぎに挽いた。昔はアワの粉であった。

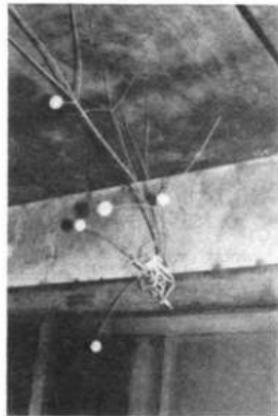
マユ玉で、オシラ様のものは、くびれのあるマユ玉で大き目に作る。他のマユ玉は丸型のものであり、入れものはザル(竹製)を使う。

マユ玉の木はミズバサの木で主に外の神、道祖神、堆肥場など、ヤマタワは家の中の神に供える。オシラ様は桑畑のクワ、又はヤマタワを使う。

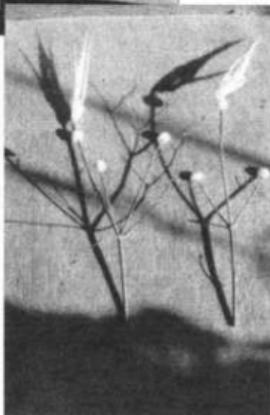
六、飾りかえ・供え方

飾りかえは正月十三日に行う。供えるところは神棚、仏様、えびす様、釜神様、井戸神様、墓地、道祖神、火防神様(屋敷内)氏神様(境内に十二様、霊影山あり)に同じハナを供える。(写真22) (写真23) (写真24) (写真25) (写真26) (写真27) (写真28) (写真29) (写真30) (写真31) (写真32) (写真33) (写真34) (写真35) (写真36) (写真37) (写真38) (写真39) (写真40) (写真41) (写真42) (写真43) (写真44) (写真45) (写真46) (写真47) (写真48) (写真49) (写真50) (写真51) (写真52) (写真53) (写真54) (写真55) (写真56) (写真57) (写真58) (写真59) (写真60) (写真61) (写真62) (写真63) (写真64) (写真65) (写真66) (写真67) (写真68) (写真69) (写真70) (写真71) (写真72) (写真73) (写真74) (写真75) (写真76) (写真77) (写真78) (写真79) (写真80) (写真81) (写真82) (写真83) (写真84) (写真85) (写真86) (写真87) (写真88) (写真89) (写真90) (写真91) (写真92) (写真93) (写真94) (写真95) (写真96) (写真97) (写真98) (写真99) (写真100)

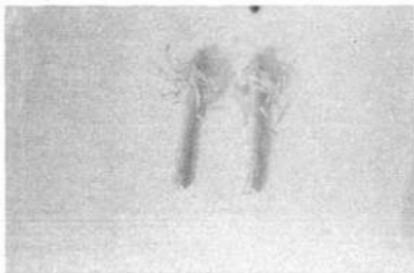
(写真22)



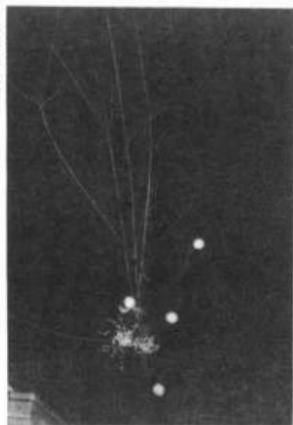
(写真20)



(写真23)



(写真21)



(写真24)

後行なう。これは一時中断していたが十年前に復活した。それは、村の提唱によるふるさと運動で消防団の協力を得て再開した。厄年の人は年令の数だけの銭をドンドン焼の火の中に投げ入れる。昔は、この行事の際に泥水を長い縄にひたしておいて、通る人たちに、はねつけることがあった。オシメ(コジタメ)にも泥水をひたして人々はオサンセン(お金)を置いていったという。水祝いという言葉は残っていない。

オシラ様にはニワトコの木の高いものを二本を半紙で中央を包み、水引きで結んで神棚の前に促えた。

七、小正月の行事とのかわり

オミタマサマは十四日朝、飯を山もりにしてオツカドの箸を十六本、これにさして仏壇に供える。なお、ハラミバシは年間の煮物用の箸として使用する。不用のものは屋敷桶荷に納める。

マユ玉のゆで湯を家のまわりにまいて家の中に蛇が入らないように、蛇除けとしていた。

十五日の粥は残しておいて十八日粥として十八日の朝温めて食べた。なお、十五日粥を神棚に供える際、湯気が立っているうちに供えろといわれていた。それは、その湯気に乗って神様が天に昇られるから、と教えられた。

昔はカユカキ棒を母屋の茶の間の軒下の屋根にさしておいた。(くず屋根の時代)これは火災除といわれた。その古いものは取って新しい年のものと替えて、古いものは苗代に立てたこともあった。

マユカキは二十日正月の朝行った。マユ玉の入れ物は一升枘か、おひつを使った。この時、飾りもの一さいをかたづけた。オシラ様に飾った枝は、とっておいて葦の上敷の際、はじめてたてる、まぶしの上ののせた。

昔はハナガシの色つきのものを小正月前に沼田方面から売りに来ていた。

中沢信英家のつくりもの

一、概観

中沢家は旧東村（利根村）に属し、旧赤城根村（利根村）と合併して現在は利根村大字穴原となっている。ここは旧会津街道沿いの標高八二〇メートルのところにあり、かつては大間々町（山田郡）の生活圏にあり他郡との交流が盛んであった。

ここ穴原集落は戸数三十五戸（小字島古井五戸、小字菅平三戸）であるが昔は五〇戸からの集落であった。

年中行事で特徴的なものは十日夜行事で、十日夜様と称する齋東で大きなワラデッポウを作り、子供たちが担いで毎戸回る。これは大人が数人で一日がかりで作るもので今は絶えた。この上に御幣を立て戸口に据えて祝ってもらうものであった。

小正月行事の飾りは古くは、固く伝統を守ってきたが、現在は簡素化された。△写真25▽また昔は全戸で小正月行事を行ったが現在は三分の一程度となった。

これは、環境は回りが山に囲まれミズブサ、ヤマタワなどの、行事に使う材料は豊富であるが、就業状態の変化により、行事に手間がかかれなくなったことが主な原因である。

二、山入り

正月二日に若木迎えを行なうことになっていた。若木迎えの山は決っていないが、昔は厩を見て、その年の恵方に出掛けた。

山入の際は山の中腹にある大黒様と称する石宮にオサゴ（洗米）切餅（三×三センチ）を二個供えてから、迎える木を見つけた。△写真26▽

木はヤマタワの木を十と十二本、ミズブサ（ハナギ）七と八本を切ってくる。これらの

（写真26）



（写真25）

木を切る際には別に供えものはしない。

△写真27▽

ミズブサの縁起は水に關係する意味があり上様式には、この木に御幣をゆわえつける。

△写真28▽

迎えて来て家の回りの日の当るところに置く、普通軒下に置いたが、決った場所ではない。ミズブサは皮をむいて干しておく、毎日陽の当る面をかえて、均等に乾くようにする。

△写真29▽

ハナはミノ、カメ、ツル、十六段を作る。

昔はノシ、チチレなども作った。

三、木の種類

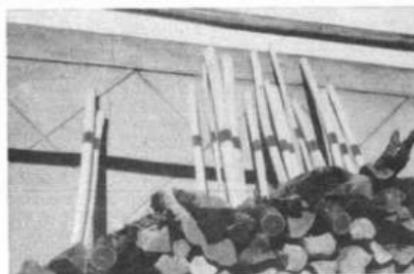
ハナの木はミズブサの木の子、まゆ玉の木は枝の部分を使う。オシラ様には、十六段のハナをつけたものを供えた時代もあった。この十六段は長い木が必要で材料が得られない場合もあり、今回は作らなかった。オシラ様にはマケタワの木にマユの形をした十個のものを、さして供えた。この地域ではハラミバシは作らなかった。山間地というか、高原の地形で水田が皆無によるらしい。ただ、マユ玉をゆでるとき使用するマナバシは小正月に作ることもあったという。



(写真27)



(写真28)



(写真29)

四、作る日・場所・道具

小正月のつりものは正月七日より十二・三日の間に作る事になっていった。十二日は山の神の十二様の日なので木を切ることが忌まれているので、この日が主であった。(かつては山林関係の職業者が多かった)

道具はハナカキナタ、ノコなどで特に決ったものはなかった。したがって作る台も、その年の都合で決めた。作る場所は家の中で別に決っていなかった。

作ったものも、特定の物に入れることはなかった。ハナは天井に打ってある釘などに掛けておいた。作るハナの数は三、五、七、十二個であった。別に決っているわけではなかった。特に昔は正月棚(年神様)を作ったときはハナの数も多かった。

五、作り方

タルマバナ、キツカキバナをミズブサの木で作った。(写真30)タルマバナが本物であるが、これを簡略したものがキツカキバナであった。(写真31)

タルマバナの大きさはハナの部分三十五センチ、柄(三×三センチ)のもの。

カユカキ棒は二十七・五センチの長さのものを二本作る。ハラミバシは作らないが、時にハナバシというものを作ったこともある。

昔は福俵といい、ミズブサを十本束ねて、切り口に西宮大神と墨で書き、神棚に供えたこともあった。これはお飾りを取るとき、か



(写真30)



(写真31)

たづけて随時燃した。

木刀、農具などのものは作った事はない。
小正月のダンゴといわずマユダマといい、
仏事に限り同じ形でもダンゴといった。

マユ玉の粉は七草すぎの吉日に挽いた。昔
通は米であるが、昔はアワ、トウモロコシの
粉も使った。△写真32▽ これを作る日は十
三日である。この前の行事は十日夕飯を神棚
に供え、十一日の朝はお茶を供えて、十二日、
十三日で飾り替えをした。△写真33・34▽
マユ玉の形はオシラ様に供える十六個のみ
くびれのあるマユ玉をさした。これを、かつ
てはボクメユダマとも呼んでいた。

六、飾りかえ・供え方

飾りかえは、その家の都合によるが多
かった。昔は炭焼が盛んで行事より仕事が重
要であった。その日に餅つき、マユ玉作り
を行った。タルマバナは釜神、神棚をはじめ
各神仏に供えた。△写真35▽（オシラ様を除
く）大体、井戸神、ホウソク神、天狗様、天神
様、氏神、屋敷稲荷、十二様、武尊様、井戸



(写真 33)



(写真 32)



(写真 35)



(写真 34)

神などであった。

道祖神にはマユ玉にキツカキバナをさしたものであった。昔はドンドン焼があったが現在はない。水祝もない。△写真36▽

今から三十年位前まではハナ菓子売りに来た。

七、小正月の行事とのかからり

オシラマチは初午の前夜にメエダマ（マユ玉）を作り行なうので小正月の行事とは関係しない。しかし、厄年の人が正月十四日に赤飯たき、氏神にメンバ（曲物）に赤飯を盛り豆腐二切れとオカシラ二匹をのせてお参りし供えていた。

十五日粥をカユカキ棒でかきまわし豊作を願ったというが、粥が熱いので吹いて食べてはいけないということは聞かなかった。

十六日のマユネリの行事、オミタマ様やカカシを祀ることなどは、一切伝わっていない。

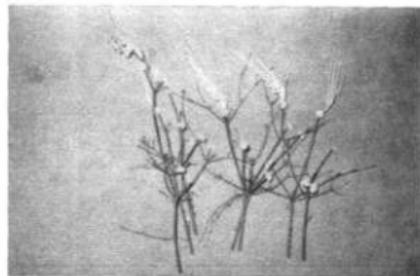
十五日は元旦と同じく朝、お墓参りを行なった。元旦はコジタメ（松に昆布、ご幣）小正月はマユ玉、タルマハナをさしたものを供えた。

成木賣めは行なわないが、柿、ボタンキョウ、モモなどの木の根元にマユ玉のゆで汁をかけてまわった。

マユかきの日には二十日の朝、お茶を供えてから「オタナをヒク」といって行った。マユ玉を入れるものはシヨウギを使った。飾りものの木は燃し木として燃してしまった。

セツンペーナ（便所神に供える人形）はないがマユ玉を家族の人数分木にさして供えていた。

（阿部 孝）



（写真36）

富岡利雄・富岡英吉家のつくりもの

一、概 観

富岡両家は利根村大沢團原で片品川沿いの團原ダムの北岸の台地に位置し、県道日向南郷、大原線が通じている。△写真37▽

ここの集落は昭和三十八年に團原ダム建設のために台地上に移転した家が多い。英治家は、その一軒である。昔、この集落は農業専業で大小麦、大豆、養蚕などの産物を作った。現在はハウス栽培も盛んであるがコンニャクも中心的産物となった。このほかダム周辺は観光地となっている。

小正月のつくりものは英吉家で作ることになっている。したがって両家の飾り方は、ほぼ同じである。これについて調査対象者選定の際不明であったので両家と調査対象とさせたい。△写真38・39▽

ダム移転と時代の変

化にともなって小正月飾りは極端に簡略化されたと聞いたが、言い伝えには貴重なものが多くみられた。



(写真38)



(写真39)



(写真37)

二、山 入 り

正月三日は仕事はじめ、若木迎えといって山入りの行事を行う。その年によってアキの方へ行くことになっており、山は別に決っていない。

持っていくものはオサゴ（洗米）を半紙に包んで行き、迎える木が見つかる、その立木の枝を折って、地面にさして立て、オサゴを供え、その包みの半紙で幣束を作り、その枝に結びつけて拜む。これは山の神の十二様をまつことで、生木が根づく、と十二様の木となり、後に他の人には、ご神木であることがわからなくなることを恐れて、枝を手で折ることにしている。なお、切口でけがをしないようにとの配慮もあった。

木はミズブサ（アケボの木とも呼ぶ）ヤマタワリを取って来る。ミズブサは節のないものを選び、ヤマタワリは飾った際に、美しいものと（枝振りが）されていた。△写真40▽
この木は他の年中行事にも、かつては使われたという。

オシラ様に飾る木は、桑畑のタワリの木を使った。養蚕が盛んな時代は、このタワリの木は貴重なものだった。（桑の木を傷つけることにより損失が大きい）

迎える木は束ねて担いで来て、不浄でないところに置いた。

供えものは、すでに山で行うので、迎えた木に対しとりたてておこなうようなことはない。

三、木の種類

つくりものを使用する木はミズブサの木で昔はアワボ・ヒエボ・福俵・ハラミバシも作っていたが現在は作らない。

ハナを、この木で作るが、この木のことをアケボの木とも呼んでいる。

マユ玉をさして飾るのも、この木を使う。すべての神仏に用いるが、オシラ様のみ桑の木である、ミズブサの木は火災にならないようにと建前には、なくてはならない木で家のハリに二尺ほどの長さのものが、どの家にも結びつけてある。



(写真40)

四、作る日・場所・道具

小正月のつくりものは正月七草から十二日頃までに作る。作る場所は座敷か、物置小屋などで作る。△写真41▽ 道具はノコ・ヘナカキナタを使う。台は別に決っていない。作ったものを入れる物は別になく、作るとすぐ、その場所へ運んで吊した。△写真42▽

五、作り方

ハナの種類でカメ、ミノ、ツルを作る。かつては、十六バネなども作った。昔は、さらにノシ、チヂレなどの美しいハナも作っていた。△写真43▽

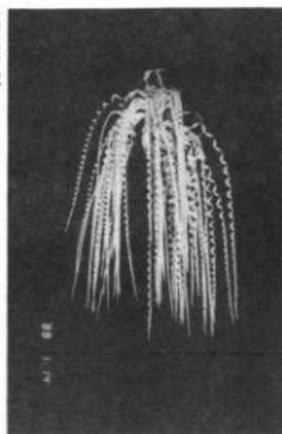
カメはミノの変形で、元をノシにする円形となり、その先端がチヂレバネとなってカメの形になる。△写真44▽
ミノはチヂレバネの小さな形のものである。△写真45▽ カユカキ棒は作らない。昔の福



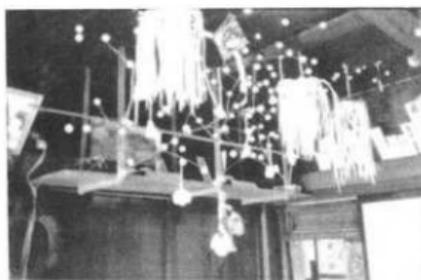
(写真43)



(写真41)



(写真44)



(写真42)

俵は七本の木の切り口に金・銀・ゴマ・コメ・ムギ・ヒエ・マメと書いて、束ねたものをえびす、大黒の前に一年間飾っておいた。

昔、ハラミバシを作った時代は、ハナギでイチゼンのみ作った。これは神棚に供えておいた。

堆肥場(肥庭)飾りはミズブサの木にマユ玉とツルのハナを飾った。昔から農具、木刀などは作った話はない。

マユ玉作りの粉は七草すぎの八・九日頃行った。家の中で石臼を使って作る。(写真46) 利雄家では仕事はじめに、米を洗って、これをシ・ウギ、又はムシロの上に干しておいた。石臼で挽くので人手がかかり、集落では時代によりエエ仕事で行っていた。この粉のみでなく正月用の豆腐作りなども同じようにエエ仕事で行っていた。

現在は米の粉であるが、かつては金のようにとアワの粉(昭和十二・三年頃まで)銀のようにと米の粉を一軒で二年も作った。

現在は大体一軒で五升位である。昔は人を頼んで飾りつけをしたこともあった。

その当時はミズブサの木も大きくて三人がかりで飾りつけたこともある。オシラ様にはマユ形(くびれのある)のものを十六個さしてマユ玉を飾った。昔は特に黒薨を願って大形のものを作った。普通の倍以上のものにした。普通のマユ玉は丸型のものであった。これを入れるものはシ・ウギを使っていた。(写真47)

六、飾りかえ・供え方

飾りがえは正月十三日、ヒキカザリと呼び松をひいて、すぐに小正月



(写真45)



(写真46)

飾りをする事だった。

ハナを供えるところは神棚、えびす様、釜神様、井戸神様、古峯様、十二様、養蚕稲荷、道祖神、こくう蔵様、便所神、墓地などである。(写真48) 便所には人数分のマユ玉をさして飾る。

集落の奥に穴御音が祀られている。ここにマユ玉をさしたものを供えた。義経がかくれたとも伝えられていた。

道祖神の供えものはハナの外にオサゴを供える。ドンドン焼は厄年の人たちが主催者となつて行方。門松集めは子たちであるが、厄年の人たちが十四日に集めることもあった。

場所は三個所あり、(久保、中、すのこずみの上の三個所)お松(門松)を盗み歩くこともあった。その際にタロベの木で打ち合ったこともあった。

集めた門松は組み合せて山にして午後二時から四時頃に焼く。厄年の人たちは酒、みかんなどを出す。銭は年令の数だけ火の中に投げ入れる。この銭は拾っても家に持ち帰らずに店で品物を買うことになっている。

昔は道祖神小屋を作ったがドンドン焼の火で十二様のおこもり堂を焼失してから廃止した。厄年の人々は朝湯に入ってからドンドン焼に向うことになっていた。



(写真48)



(写真49)



(写真47)

一般の人たちは、半紙三枚張りしたものに願い事を書き、笹か竹の先に結びつけて、火のまわりに立てた。例えば「福俵」とか「豊作」などの文字を書いたものだった。

七、小正月行事とのかかわり

この集落には「水祝い」はないが、隣の大原集落では厄年の人たちに大人も、子供も雪を丸めて投げつけることが行われていた。便所に飾る人形（ロメゴ、ムコと呼ぶ）が作られていた。現在は作る人はいるが飾ることはしない。（作る人・富岡みつ子八十五才）

キジ車、農具、木刀などのつくりものは昔からなかった。なお、オミタマ様のこともない。小正月に飾ったミズブサの芯は、蚤の掃立の際に燃し蚤室を、いぶした。なお、この芯ではないが初午行事の際にも、いぶすことがあった。

小正月のマユ玉をとっておき、山仕事で水を、やかんで持って行くとき、その中に入れると水にあたらなといわれていた。便所のマユ玉を焼いて食べると風邪にかからないといいた。この時の焼き灰を食べてもあたらなといわれた。

昔、便所に女の人が人形を作って十四日に飾った。これは安産祈願のためだったと伝える。ハナの処分は初午、二の午に分けて燃した。

なお、蚤のハシリズウ（初めのズウ）の上のせ、上蔭のまぶしの真似をした。

（阿部 孝）

高山岩造家のつくりもの

一、概観

高山家は利根川の支流片品川の上流、山あいの農家が、新しい年の豊作を祈って作り続けてきたつくりものを今に伝える数少ない家である。特に、ノシとチヂレの作り方は、ハナカキナタを使わずに手製の小刀で、手前から向うへ削り出して作るという独自の技術を誇っている。コエニワカザリ（アラボ・ヒエボ）には竹がないのでアカボヤ（ミズキの枝）を使う。福俵にもミズブサ（ミズキ）で作り、ヌルデは使わない。農道具やカタナなどは作られていない。

二、山入り

「山始め」とか「仕事始め」にあたるもので、二日の朝山入りをする。南の方向の山（高岩）へ行く。御幣とか供えものではなく、木を切る前に十二様（山の神）の石詞を拜む。切り方にも特別のことはなく、危険でない方向へ、危険でないように倒す。〈写真50〉
切る木は、ハナに使う木はミズブサ（ミズキ）、タルミ、アラボ・ヒエボの木はミズブサ、まゆだまの木はアカボヤ（ミズキの枝）で、昔は家まで担いで来たが、今日では、トラクタで運び、蔵の軒下へ置いておく。供えものはしない。

三、ハナカキ

小正月のつくりものは主としてハナなのでつくりものを作る日をハナカキとよび、七日頃から十二日頃までの間の適当な日にする。場所はダイドコロが多かったが、エンブチの所で行くことになり、特別の台は使わない。ハナカキ道具は、マキキリノコギリの折れたものを手入れして自分で作った小刀状のハナカキを使う。

（一）ノシ

ミズブサの木の皮をむき、末の切り口を縁ぶちにかけて、ハナカキで少し切り、それを左手指でおさえ、右手のハナカキで末口の方へ



（写真50）

押して行き、切口の所で止める。(写真51) 木を少しずつまわしながらこの動作をくりかえし、木を二回転ぐらいして終り、のこぎりで切りはなす。

□ チヂレ

ノシと同じように末口を縁がちにかけて、左手で切り口をおさえなさいでそのまま口の方へ押して行くとタルまわりながらチヂレができる。(写真52)これを三回・五回・七回くりかえして、最後の一本をノシをかく要領でチヂれないようにかき、まとめて木から切りはなす。

□ 福俵

ミズブサの直径二ノ三cmのもの六本、長さ十五ノ二〇センチメートルぐらいに切り、それを麻なわでしばり、切り口に米、大麦、小麦、大豆、粟、稗の文字を書く。(写真53)

□ 肥庭かざり

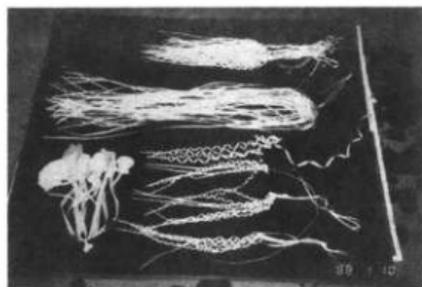
竹がない片品村では、肥庭かざりにはアカボヤの芯のある枝つきの木を使い、ミズブサの木を長さ一〇センチメートルほどに切り、皮をむいたその皮がハナになるようにしたもの十五個作ってアカボヤの枝の先にさして仕上げ、ヶ



(写真52)



(写真51)



(写真53)



(写真54)

エニワ（肥庭―堆肥場）に立てる。△写真56▽

④ まゆだま

十三日に作る。近年は米の粉を使うが、昔は粟餅、キミ（きび）餅もさした。粉は七・八日頃挽いて用意した。大きさは同じものを紅白で作り、ざるに入れて、アカボヤにさす。

四、お飾りかえ

十三日にする。ノシを神棚の前に下げて供える。△写真57▽チヂレはまゆだまをさしたアカボヤの枝に下げる。福依はえびす、大黒様に供え、翌年までそのままにしておいて、翌年のまゆだまをゆでる時に燃す。肥肥かざりはケエツカ（肥庭―堆肥場）の上に立てる。豊作を祈願するという。

まゆだまは、大きめのアカボヤの枝に紅白のまゆだまをなるべく多くさして、神棚に結びつけて飾る。花菓子を下げてにぎやかにする。△写真58▽ 仏壇にはまゆだま三個（紅一、白二）、釜神、井戸神や、墓地にも同じようにして上げるが、稲荷様には七個（白四、紅三）にする。オシラ様のまゆだまというのではない。

五、小正月の行事と係わり

① ドンドン焼

オオヤとよぶ大きいものと、ベンジョといふ小さいものとの二つの小屋を作る。オオヤ



(写真55)



(写真57)



(写真56)

(写真 59)



(写真 58)

は円錐形のもので、心棒に正月に使った松、しめなわ等をつけて作る。心棒の上方にはダ
ルマなどをつける。写真59V ベンジ・はオオヤから10mほど離れた所に作られる。世
話人が午後四時頃、時を見はからって先ずベンジ・の方に火をつけて人寄せをする。村の
人はこれを見て集まって来る。村人の集まりぐあいを見てオオヤに火をつける。男女七才
と、女十九才、三十三才の厄年の人は、この時村人にミカンを振舞って、ドンドン焼きが
終わったあと心棒のこげた所を欠いて家へ持ち帰り、神棚へ上げて供える。男の二十五才、
四十二才の厄年の人は、友達や親戚などを招いて、酒肴を振舞って厄落としをする。

水祝いはない。

(二) オシラマチ

小正月にはオシラマチはしない。

初午の日に十六段とよぶまゆだまを作って供えた。これは自分の家の桑畑から桑の
三つ又の枝を切って来て、その枝にまゆだまを串だんごのようにさして作るが、数に
きまりはない。また、このまゆだまをゆでた汁を家のまわりにまいた。もぐら除けと
いっている。小正月にはやらない。

(三) まゆかき

十九日にまゆだまをとる。まゆかきと言わざるに入れて処理する。お飾りをひくという。
まゆだまに関する話はない。

ノシ、チヂレは一カ所にまとめておき、春蚕の初上げの時マブシとして使う。アカボヤ
は燃したりする。

六、おわりに

ハナの作り方について、「ハナカキナタで手前の方に引っぱって削るのは無器用な人がやることだ」と話す高山家の作り方は、他で見ることのできない独特のものといえるようである。カユカキ棒、ハラミ箸は作られず（十五日粥はしないという）、農道具も作られていないことなど、興味をひかれるものである。

（奈良 秀重）

梅沢千代松家のつくりもの

一、概観

梅沢家は、片品川の上流の山あい、高山家とは川をはさんだ右岸にある。当主は農業の傍、若い頃は馬方もしたり、後にはこね鉢（木鉢）作りをしたり、岩管細工をしたなど器用なところをみせ、民謡の歌い手（片品おけさや片品馬子歌など）でもある。つくりものは、タシ、チチレ、福俵、肥庭かざりやカユカキ棒やハラミ箸は作らない。ドンドン焼きは十四日朝で、男女七才の子どもを厄年といつて厄落としをしている。十四日夜のオシラマチはなく、二月の初午の日にオシラ様の祭りがある。

二、山入り（山始め）

昔は「仕事始め」といい、二日朝、若い者が子どもを連れて山へ行った。山は村の山で（鹿田堂沢）、半紙とオサゴ（米）を持って行き、半紙を手で破って御幣を作り、木の切り株の根本にオサゴを包んだ紙をひろげて供え、手で作った御幣を切り株の所へさしておく。△写真60▽ 切る木はミズブサ（ミズキ）またはタルミの木で、その年の「あきの方」へ向けて切り倒し、これを背負って来る。家では蔵の軒下に置き、オサゴを供える。ハナをかく木は、皮をむいて天日のある所に置いて干す。ハナに使う木は、ミズブサ（ミズキ）又はタルミ、時にニワトコでハナをかく木は「カッポシ」（干草）刈りの時に切つて「カッポシ小屋」の草の中に入れておき、一月二日に皮をむく。マユダマをさす木はアカボヤ（ミズブサの枝のこと）が中心で、オシラ様（蚕神）の木は、桑の三つ又になっているものを使う。

三、ハナカキ

小正月のハナを作る日は特別にきまつた日はなく、正月になれば時々ハナをかいてみるので、七日から十二日頃で、場所は縁側が



（写真60）

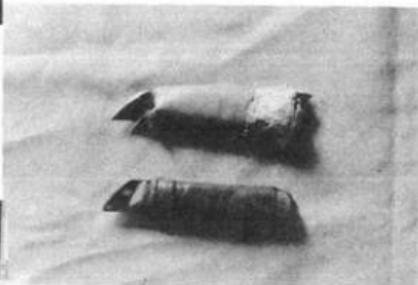
が多く、道具はキリダシ（小刀）と鋸で、台は特別にない。△写真61・62▽ヘナは一段、十二段、十六段は作らない。チデレは材料の木が乾燥してからかく。縁側の敷居などに木の末を突っかけておき、キリダシで手前から突き出すように押して作る。

△写真63・65▽（高山岩造家と同じ方法）

ノシは、材料の木が乾燥しないうち（生のまま）にかく。チデレと同じ要領で、手前からキリダシで少し突いて「はし」を作り、それを左手の指でそれをおさえてから押して、チデレができないようにして作る。キリダシは、鋸の刃の欠けたものをヤスリで切って自分で作ったものを使う。



(写真 63)

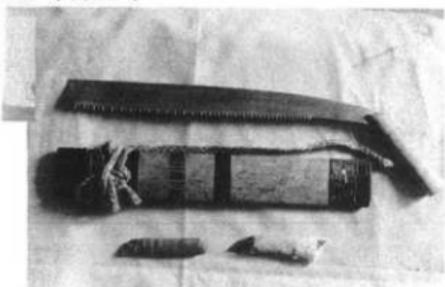


(写真 61)



(写真65)

(写真 62)



福依は、ミズブサの直径四と五センチメートルぐらいのものを、長さ十と十五センチメートルぐらいに切り、六本を編でしぼり、切り口に「大・福・神」の字を書き、残りの三本にはそれぞれ俵の口の絵を書きこむ。

△写真66・67▽

コエニワカザリは、ミズブサの枝が三段のものを用意して、マユダマをさし、チデレバナを下げる。これをケエツカダンゴという。

農道具やカタナ（木刀）、カユカキ棒、ハラミ箸などは作らない。

四、お飾りかえ

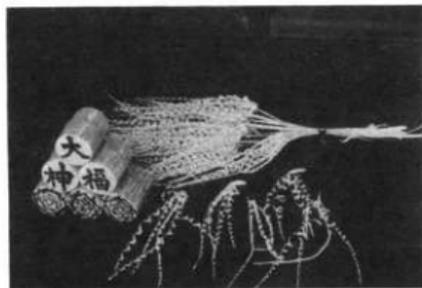
お飾りかえは一月十三日、ノシは正月棚の中心に下げる。アカボヤにマユダマをさし、枝にチデレを下げ、棚の左右に飾る。お正月様だけに「ウス」「キネ」を一つずつさす。

マユダマの大きさはほぼ同じで特に大きいものはない。△写真68▽

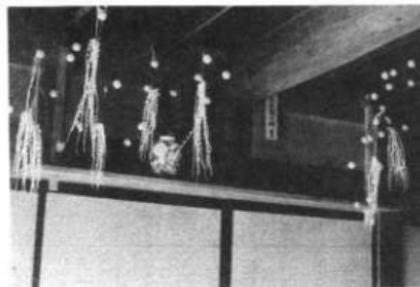
仏だんには、アカボヤにダンゴをさして、その枝にチデレバナを下げる。

井戸神、十二様（山の神）には、アカボヤにマユダマをさして、チデレバナを下げたものを上げる。△写真69▽ 墓地・神社・お堂も同様にする。えびす様にはマユダマの他に福俵を上げる。これは小正月がすんでもそのまゝにしておき、翌年のマユダマをふかす時に燃やす。オシラ様（蚕神）には、桑の木の三つ又のものにマユダマをさして上げる。

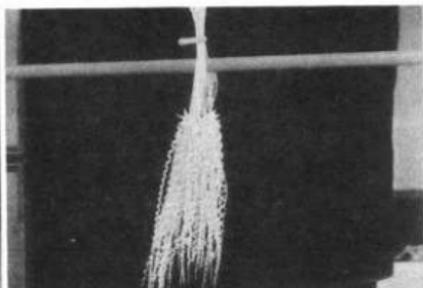
コエニワカザリはケエツカ（肥塚のなまりでコイニワ）へ立てる。農業の神様という。



(写真66)



(写真68)



(写真67)

五、小正月の行事と保わり

(写真69)



① ドンドン焼き

十四日の朝、松飾りとオシメ(しめなわ)、モノガラ(豆の木などの残りもの)などを、片品川の川原近くの平らな所へ持ち寄り、オオヤ(大屋)という大きい円錐形のものを作り、てっぺんにダルマなどをつける。オオヤのすぐ近くにセツチンとよぶ小さなものも作る。△写真70▽午後三時か四時頃、組頭(交替制)がセツチンに火をつけて人寄せをすと、家々から人々が集まって来る。そこでオオヤに火をつける。厄年の人がみかんなどをくばる。火が消えたあと、心棒をアキノ方へかえして(倒し)、燃えて黒こげの木を欠いて来て神棚へ上げる(蚤が当るという)。また書初めをドンドン焼きで燃すと字の手

が上がる(上手になる)といわれた。男の四十二の厄年の人は「ドウロク神」の日に「厄落とし」をする。前もって呼んでおき、ドンドン焼きの後近所の人に来てもらい、酒を飲んでもらう。女の人は甘酒、菓子などを出して一夜を過ごす。男の人が来れば酒を出すという。

昔は厄落としとして、男はふんどし(褌)女はくし(櫛)など頭へつけるものを三本辻(三叉路)に置いて、後を振りむかないでドウロク神へ行き、終った後神社参りをしてからチュウヤド(中宿)といって親せき関係の家へ寄って自分の家へ帰ったという。男女とも七才の子どもを厄年といい、豆いりと頭の毛を紙に包み、体をこすってドウロク神(ドン焼き)に燃やしたという。

② オシラマチ

十四日夜にはやらない。

オシラマチは二月初午の前日(いまは二月十日)に、小正月に供えたチヂレを一



(写真70)

升餅に入れ、その上にマユダマを山盛りにして、床の間に供える。初午の朝、正月の棚の松とアカボヤをイロリで燃して煙を出す。これはオシラ様がその煙にのって天に上るといわれる。

③ 十五日粥

小豆粥をしない。十八日粥もない。

④ 蛇除け

十三日にマユダマをゆでた汁を、手桶（バケツ）に入れ、それを正月様の枝につけて屋敷のまわりにまいて歩く。蛇除けという。

⑤ まゆかき

十九日をまゆかきの日といつてマユダマを片づける。とつたマユダマは、かごかざるに入れて後で食べる。アカボヤは二月初午の朝燃し、チヂレはオシラマチに使ったり、春蚕の上族の時、最初の熟蚕を上げるマブシとして使つて豊蚕を祈つた。

⑥ その他

一月十二日は村の寄合の日で、新年度の役員をさめる会議の時に、男四十二才の厄年の者が酒二升と重箱二つの肴を持って行くことになつてゐる。

（奈良 秀重）

高山茂男家のつくりもの

一、概観

高山家は、片品村でも南に位置するが、武尊山の南東麓の農家で、つくりものはチヂレとノシ、カユカキ棒、福俵を作り、肥庭かざり（ケエツカダングともいう）を百姓の神としてケエツカ（肥塚）に立てる。ドンドンヤキには厄落としをするだけでなく、家に招いて酒肴のご馳走をしていることは、利根郡の中で、「東入り」とよばれる片品川流域でも片品村の特色で、スルデは使わず、農道具や木刀も作らない。

二、山入り

一月二日は「仕事始め」で「若木迎え」ともい、朝、近くの山へ行く。御幣は持たずにオサゴ（米）を最初に切る木のまわりに円形に置き、手を合わせて十二様（山の神）を拝み、南の方向へ切り倒す。（写真71）
木はミズブサとアカボヤ（ミズブサの赤い枝）で、背負って運んで来て、物置き西側へおいておく。ミズブサ（ミズキ）はハナにもつくりものにも使い、その枝はアカボヤとよんでマユダマをさす木に使う。箸の木というのではない。

三、ハナカキ

小正月のつくりものをする日は七日か八日で、ハナカキといい、陽あたりのよい縁側などで、鋸と小刀を使ってやる。作ったものは筥に包んでおくが、福俵などは年神様の棚の上にかけておく。

（一）ハナつくり

（花咲字山崎 星野忠亮氏 明治四十二年九月二十三日生）

ノシは、ミズブサの皮をむいて末口を縁側の縁ぶちにかけて、けずりを少し入れてそれを



（写真71）

左手でおさえて、右手の小刀を押してゆき、切り口のところで止め、削りを向う側へはなす。△写真72▽この動作をくりかえして、木をまわしながら一回転、二回転して鋸で切りはなす。この回転数が多いほどにぎやかになる。△写真73▽

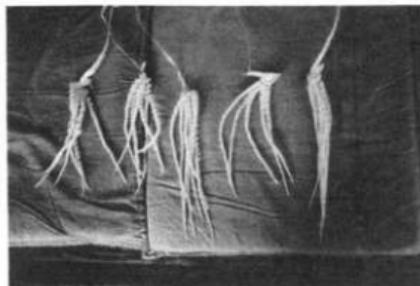
チヂレは、ノミを作る動作とほぼ同じだが左手で削りかけ（削りの最初）をおさえないで削ってゆくと、クルクルッと削りがまわりながらチヂレとなる。△写真74・75▽この動作を三〜五回くりかえし、最後にノミを作る要領で一本かいて、チヂレを切り離す。△写真76▽



(写真73)



(写真75)



(写真76)



(二) カユカキ棒

現在は作らないが、昔は、ミズブサの木を使い、ハナをかき、木の元を十文字に割って作った。

(三) 福俵

これも昔のことだが、直径五、六センチメートル、長さ二十センチメートルくらいのを六本用意し、麻なわでしばり、切り口に米、大麦、小麦、大豆、粟、神の文字を書いた。

(四) コエニワカザリ

木の芯のあるアカボヤの枝が二段のものを使う。枝の先にくぐもマユンダをさし、そのマユンダにチヂレをさして飾りたて、コエニワ（堆肥）の上に立てる。

(五) マユンダ

小正月のダンゴはマユンダという。米の粉を使うが昔は神の粉を使った。正月の七日か八日あたりの都合のいい時に粉挽きをしておき、十三日につくる。供える神仏で形や大きさがちがうが、十六マユンダは大きく、マユの形のを十六個、他のものは丸いものにかままっている。マユンダはシ・ウギに入れ、アカボヤにさして供える。△写真77・78▽

四、お飾りかえ

カザリカエは十三日にやる。

ノシの供え方は、神棚が正月棚にもなるので、その前に下げて飾る。△写真79▽

チヂレはアカボヤ枝にかけたり、



(写真77)



(写真78)



(写真79)

マユダマにさしたりする。(写真80) 仏壇やえびす様にはチチレバナを一つづつ下げる。釜神様にはチチレを三つぐらいマユダマにさす。神社やお堂には小さいアカボヤの枝にマユダマを2・3個さして、これにチチレをさす。

マユダマは、大きめのアカボヤに丸いものをさして、花菓子・チチレと一緒に供える。

オシラ様(童神)には、十六メエダマとよぶ大きいマユ形のもの十六個をアカボヤにさして供える。オシラ様は十六才で死んだので十六個のマユダマを供えるのだといわれる。

五、小正月の行事とのかかわり

(一) ドンドンヤキ

花咲地区三十軒のお松やしめかざりを、厄年にあたる人たちが十四日午後集めてまわり、オオヤとセツチンとよぶ二つの小屋を作る。(写真81) 午後三時半から四時頃、村の人々が集まると四十二才厄年の人が「セツチン」から火をつける。厄年は数え年で男が十五・二十五・四十二才、女性は十三・十九・三十三才。厄年の人は、身につけたもの(手ぬぐい・ハンカチなど)とお金を一緒に三本辻に置いてから道祖神を拜む。それからミカンを村の人に配ってくれる。またその場所でする人に、男は酒、女は甘酒を飲みに来て下さい、と招く。夕方から村人が厄年の人の家へ行って、酒、すし、ようかんなどをご馳走になる。ヤタオトシという。

ドンドンヤキでは、アカボヤにマユダマをさしてドウロクジンの火で焼いて食べる。

(二) 十五日粥

昔は、ミズブサの木を削り、ハナをかいて元を十文字に割ったもので、十五日粥が煮え



(写真81)



(写真80)

たあと、鍋の中を割った方でまるくかきまわし、つぎに十文字にかき、いちばんやわらかいところを神様に進げた。カユカキ棒はとっておいてあとで割れめに豆と麦をオヒネリにしてはきみ、田の水口へ立てたものであるが近年はしていない。十五日粥をかきまわす時の唱え言はない。ハラミバンは作らなかつたから使ったこともない。

四 マユカキ

マユダマを片づける日は十九日、とつたまゆはシ・ウギに入れてから片づけ、しまっておいて農作業の間食にした。

小正月の供えもの、飾りものは十九日に片づけることになっていて、正月の松とアカボヤは一緒にして、その日に庭で燃やした。

ハナはとっておき、ノシ、チヂレを春蚕の最初の上簇の時にマブシとして使った。

四 オシラマチ

小正月にはオシラマチはしない。

オシラマチは二月初午の前日（今は二月十日）、一升ますにチヂレバナを入れ、その上に新しくつくったマユダマを山盛りに入れて、床の間に供える。△写真82▽

六、おわりに

高山家のチヂレは、ミズブサの木のひとつまわりして作るものというよりも、小刀で三本から五本削ってできたものを木から削りとって、一本を上のにのばして吊るようにしたものを中心である。マユダマにさすものは、チヂレを木から削りとる時に、小さいコッパ（木っ端）のような固いかたまりを削りとり、この部分をマユダマにさして下にたれ下がるようにするものである。これは、小刀を向うへ押すようにして作る技法とともにこの地方にみられる独特なものようである。農道具・木刀・ハラミバンが作られていないことの理由はわからない。

（奈良 良秀 重）



（写真82）

関 登志雄家のつくりもの

一、概 観

関家は、川場村谷地富士山に所在する。つくりものは、もうやっておらず、今回調査のために作っていただいた。

二、山 入 り

山入りは正月二日頃からの日取りで行ったが、二日が多かった。「若木ムカエ」と言い新年のアキノカタへ行く。そこで木のある所でアキノカタの方を向いて拜む。

暦の良い日と天候で左右されたが、午前中に行った。

お供えはオサゴを半紙につつみ、モチを二かけ持ってそなえる。手をあわせ十二様と山の神にいのる。

ノコギリとナタで、ヤマタワ、ミズキ、ニワトコ、オツカドを切る。

縄や麻でしばり、背負い縄でしょってほこんでくる。

ほこんでからは、座敷の軒下に広げておく。

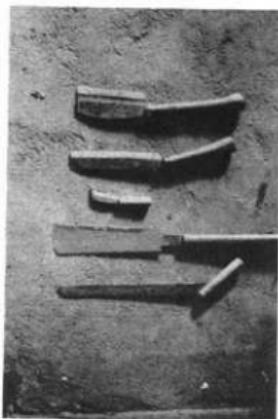
オツカドとニワトコでハナをかき、ツクリモノもつくる。大神宮にそなえるまゆだまの

木は、赤い木を使ってはいけなからヤマタワを使う。

三、ものつくり

ものつくりは、正月に入ってから、二日から十二日までのうちにやった。特に日は決っていない。

土間で、ノコギリ、ナタ、ハナカキナタを使って作った。台は丸太を使い、作ったものを床の間においておく（写真83）



(写真83)



(写真 85)



(写真 86)



(写真 87)

ハナは二種類で一段のものと、十六段のものがある。ニワトコの木を元から先に削って一段のものを作る。△写真 84▽ 十六段のものは、削りではなく、十六の芽のあるものを二本そろえ、水引でしばったものである。桑がまっすぐのびるよう、糸が出るようにそなえるという。

チヂレやノミは、花葉子と一緒に沼田市奈良町大倉から売りにきたものを買った。

カユカキ棒は、オツカドで作った。皮を削り、片方をとがらせた。反対側を四つに割った。ハナはなく、割れ目に何もはさまない。△写真 85▽

ハラミバシは、太いものを削り、割って作った。家族の数にお供え用の一膳分を作った。

△写真 86▽

福俵、木刀、農道具は作らない。

アワボヒエボは、門松に使った竹に、アワボとヒエボとダンゴをさしておく。できたものを堆肥の上にさす。削りはない。アワ・ヒエがとれるようにするためという。△写真 87▽



(写真 84)

まゆだまは米の粉で作った。石や砂のまじった米をひいた。米はお正月前にひいておきまゆだまは十三日にふかした。シウウギに入れ、ヤマクワかミズキにさした。〈写真88〉
 大神宮にそなえるまゆだまの木はヤマクワで、他はミズキでもヤマクワでもよかった。まゆだまは、染め粉で赤・緑にそめた。セッチンヒナは、二日の晩に半紙で作った。頭は半紙を丸めて作った。男女一対作った。

〈写真89〉

四、お飾りかえ

お飾りかえは十三日にやった。一段のハナは、大正月に松を飾った所にはすべて供えた。神だな、年神だな、仏壇、えびす様、釜神さま、井戸神、墓地、石造物、神社やお堂、オシラ様、山の神、倉、馬屋、物置、便所、まゆだまは、木を年神だなに固定してからダンゴをさした。

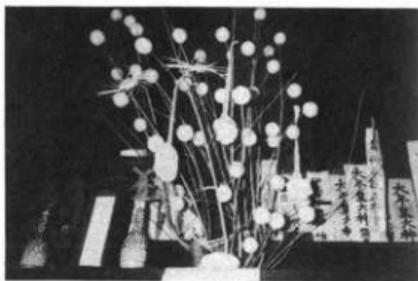
〈写真90〉



(写真88)



(写真89)



(写真90)



(写真91)

オンシラ様へは十六の大きいものを供えた(写真91) これだけで粉を一升使った。木には、ハナと飾り菓子をさげた。

セツチンヒナは、十四日に飾って、そのまま一年間おいた。

五、年とり(十四日年)

十四日の晩は、馬の年取りといって馬にうどんを作り、おぜんに入れて供えた。

六、道祖神とドント焼き

ドント焼きは昭和二十九年まで、正月十四日の午後やっていた。モミの木などで用意し、子どもが松や、しめを十四日の朝集めてまわる。

お札や「道祖神大明神」と書いた書き初めをもやす。ミズブサの木にだんごをつけて焼いた。厄年の人が手伝った。年の数だけお金を火の中に投げ入れた他、みかん、菓子をくれた。松の節の所を炭をとってきて、稲荷と家の屋根にあげると火伏せになるといふ。

七、十五日粥

カユカキ様のとがった方を粥の中に入れ、代かきの様に、たてよこにかいた。

その後床の間におき、苗代の水口にまっすぐにして立てる。

ハラミバシは、粥を食べるのに使い、十六日田楽を作って食べたあと屋根にさした。

粥は吹いて食べると田圃に風が吹く。食べないと蜂にさされるという。

八、マユカキと片づけ

マユカキは二十日にやった。朝シロウギにとり、木の箱に入れておいた。

(写真92)



つくりものも、二十日にかたづけ、かわかしてから、イロリでもやした。
十八日に十八日粥をした。十五日粥を残し、足して作った。食べると、蜂にさされないという。

九、その他

正月十六日、盆十六日にセンビキガユのツトッコを作り、ヒエ、トウモロコシ、大麥を煮たものをのせ、馬頭觀世音に供えた。(写真92)

養蚕の神仏は、沼田市戸鹿野のトウゼン寺迦葉山、川場村門前吉祥寺の金甲稲荷、花咲の春山の石觀音(十二様)で、お礼を受けにいった。

正月最初の酉の日、午の日に馬屋肥を出した。七草よりあとになる。

まゆだまのゆで汁を母屋のまわりにまくと火伏になるという。

二月の初午には、オシラサマにダンゴをそなえ、ザルにマブシのわけの松葉と、糸のわけのウドンを入れて供えた。

一月八日はオコトハジメといい、一ツ日小僧が来るからといって、メの多いものを出しておいた。かごをよく出しておいた。

材料の木は周囲に充分あるが、つくりものを作らなくなったことから、ハナカキナタが失われている家が多い。このため、まだ作ることができるが、継承という点では、むずかしいようである。

星野^{きのえ}甲家のつくりもの

一、概観

星野家は川場村木賊（とくさ）に所在する。川場の中心から花咲峠へ車で二十分ほど向った所で、気候がもう一つ厳しい所である。

つくりものは、もう長くやらないとのことであったが調査のために再現していただいた。

二、山入り

正月二日が仕事始めであり、若木むかえをした。炭焼きをやっているので、その伐採地の跡地へ行った。

一年生は生えているが、ミズキやヤマタワの二年生のもののほうがダンゴ木としてよいので、若木として切ってきた。なければ一年生を切った。二年生の方がきれいで良かった。

特に山入りでのやり方はなく、手ノコで切って、しょったり、かついだりして持ってきた。

物置の中に置き、お洗米を供えた。

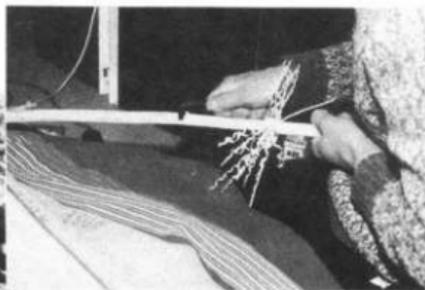
ミズキではハナ、つくりものを作り、年神のまゆだまの木にした。ヤマタワは、つくりものに使い、オシラ様ザシキなどのまゆだまの木に使った。

アワボ、ヒエボをニワトコの木を切って作ったことが五、六年あったようだという。

三、ものつくり

十三日に台所やイロリ端で作った。ハナカキナタやノコギリの刃の欠けた端で作った。

だんごにさすものは、削ったハナを二片ほどで、だんご木にさすものは、丸くチヂレをかいたもの、共に名前はない。△写真93・94▽



(写真93)



(写真94)

カユカキ棒、ハシ、福俵、木刀、農道具は作らない。

だんごかざりのだんごは、米と粟の粉を半々に使い、キバチでこねてからふかした。

△写真95▽

まゆだまといったらしい。

十二月の暮のうちにひいておき、十三日にふかした。

粉は三升用意して、大きい十六個に一升、まゆの形のものに一升分、あちこちに供える

もの用に一升使った。

だんごを、柿、梅、桃の木にかけると、実がたくさんとれるという。

四、お飾りかえ

十三日が飾りかえで、ダンゴ木を、神だな、年神だな、仏壇、釜神様、オシラ様にそな

えた。△写真96・97▽



(写真96)



(写真97)



(写真95)

年神だなの枠に木をつけてからダンゴをさした。花菓子は売りにきたものを買ってさげた。〔写真98・99〕

だんご木は、三宝荒神さまの所に大きいものを一本供えた。十六の大きなだんごにハナをさした。白のみである。

小正月飾りの年神だなに供える四本のだんご木には、一本に十個くらいのだんごをつけた。

粟の粉をひいたものを入れた黄色いだんごを少し入れる。

五、道祖神とドンド焼

木賊ではドンドン焼はない。下の方ではやっていた。

六、マユダマカキと片づけ

十六日にだんごをとり、おほちに入れた。

小正月の供えものも十六日にとって、すてた。

ミスブサのだんごをつけたまま灰の中に入れて焼いて食べた。だんごの中に枝がこった。

七、養蚕とつくりもの

オシラマチをやったことがある。おかゆを食べた。

八、その他

戸口の飾りにチヂレのないハナをさげた。



(写真98)



(写真99)

せっちんびなは親が半紙で作っていたのを見た。女の人の厄はらいといい、暮に作って二十日正月まで置いておいた。行事は十四・五年前まで旧正月でやっていた。その頃の方が雪が多くて仕事にならないのでそうしていた。

九、まとめ

星野家のつくりものは、だんご木だけになっているといいだろう。田もないところであるので、その面のつくりものはなかつたようである。

（井野修二）

石井周治家のつくりもの

一、概観

月夜野町上牧から北東の奈女沢温泉への道をさらに右に折れ、急な上り坂を辿ると吉平に到着する。(写真100) この地からの眼下に拡がる景観には見るべきものがある。

ケズリバナのうちノシバナは、ハナカキコガタナを用い、手前から押し出すようにしてタルミの木を削って作られた。一軒に一つだけを作り、チャノマの入口の外側へ吊るした。九尺もあるノシバナを作ったこともあるというが、今はもう見られない。

小正月は女たちの正月とされ、米の粉のダンゴを作ってミズキの木に飾るが、近年ではダンゴを紅白にさし分けたりもするようになったという。また、カユカキ棒の十文字の割り口にカラスの焼き米と呼ばれるおひねりを挟み、苗代の水口に立てるところもあるが、カラス除けになるのだという。

二、山入り

「山入り」の日として正月二日を「仕事始め」といい、若木迎えをする。

年神様の恵方(明きの方、よい方向)へ出掛ける。北平方面へ行っていた。

供えもの、御幣、祀り方など、特に決められたものはない。

木を伐る時は「むかって木を伐らず」といい、厩にそって木を伐っている。伐る木はミズキやハナに使うタルミの木が主である。伐った木は適当に担いで持ってきている。

家へ持ち帰ってからの扱い方は、ミズキは庭先へ一本ずつ立てて置く。タルミは、家の東の軒場へ立て掛けておく。供え物は特



(写真100)

三、木の種類

つくりものに使用する木はタブリバナには、クルミのほか、ミズキやヌルデを使う人もいる。つくりものには、オウカド（ヌルデ）のほか、シナの木やクルミの若木を用いている。まゆだまをさす木としてはミズキにダンゴをさし、マツを飾ったところに供えている。オシラ様のマユダマには、ヤマツクリを使う人もいる。その他の木として吉平では、一軒、アワボヒエポにオウカドを用いて作っているのを見かけた。箸の木には、クルミやヌルデが使われている。

四、作る日、場所、道具

小正月のつくりものを作る日は特に呼び名はない。

正月十三日までに作るが、正月休みのうちに一日かけて作ってしまう。

作る場所はダイドコロやイロリパタで作っている。

（写真101・102）

道具はハナカキコガタナ（一・三〇六）

（写真103）で削り、ハナをかく。上牧の土角

橋の鍛冶屋で製作したもので、いくらかポロ

布を巻いて使う。

台は特になし。

つくりものを置いておくところは、チャノ

マに持っていく、神棚の下の方へ机を置いて

そこへ置く。

カユカキ棒などは、神棚へ置く。



（写真101）



（写真102）

五、作り方

昭和初期までハナを作っていた。

神仏に供えるタバタバナは、長さ三十七センチメートルほどのタルミの木などの皮を剥ぎ、ナタで木を八つ位に割り、その木肌ヨリバナを三つ五つ付けている。

ニワトコの枝のメに、二か所くらいハナをつける人もいる。その二本を半紙にくるみ、水引きでマルいて、ザシキの天井へ吊るす。勢いのある、伸びのよい様子を示している。ニワトコのカブツがどこの家の庭にもあったものだ。

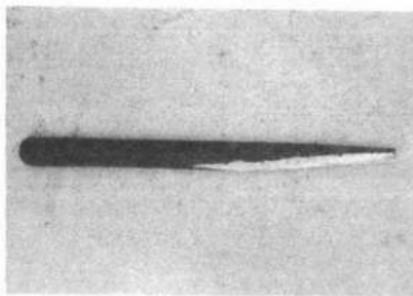
ヨリバナは、木をすこし干すが、ノシの方は、生の木がよい。削った先端をおさえるかどうかで、形の変化がでてくる。ハ写真104ノシバナは、タルミの真っ直ぐな棒状の若木を伐ってきて皮を剥ぎ、しらたの部分の木肌からハナカキコガタナで木の先の方から削って薄い帯状の木片を末口に近い位置で削り止める。ハ写真105これを何度もくり返してなるべくたくさんハナをつけ、そのそばからノコギリで切り落とす。末口の厚さ二cmほどの円盤状の部分に、木片が垂れている状態のものとなる。

ヨリバナは、ノシバナのように木の皮を剥ぎ、木部の表面を日に乾かした後に削ると、表面に水分がなく中に湿りがあるので、丸状によれる。小刀は斜めに当てられる。戦前までは作っていた。

ノコギリで切り落とした後、シンの穴に麻ヒモなどを通して吊るした。

師の人が、正月二日頃やってきて、売っていたりもしたことがある。

カニカキ棒の作り方は、最初にオッカドやタルミの皮を剥く。ノコギリで三十cm位にして、下を削り落とす。ナタを用いて四角の錘状にする。上は十文字に割り口を入れる。最後に、末口



(写真103)



(写真104)

にヨリバナをかきつける。

ハラミバシの作り方は、オッカドやタルミの皮を剥いて、適当に割り、ナタで作る。中央を太く、両端を細くする。稲の穂パラミに形どった太箸となる。仕上げにはヘナカキ小刀を使う。家族の数と一本を余計に作る。「ハシは端に作る」という。

肥庭かざりの作り方は、コエニワは、タケの先にオッカドの木を二つずつ切ってつけ、庭先に出した。馬のコエを出したところにアーボーヒーボーを作った人もいた。

福俵・木刀・農道具は作らない。

小正月のダンゴはまゆだまとはいわず一般にダンゴと呼び、ダンゴの正月ともいっている。

まゆだまの作り方は、米の粉を用いるが、昭和初期までは神の粉を使った人もいた。

粉は、後閑や上牧でひいてもらっていた。昭和三十年頃までは、吉平でも水車が五カ所ほどあった。都合のよい日で、できれば水の凍る前にひければよかった。

正月十三日に作られるが、オシラ様に供えるもの以外は同じ形状のものを作った。シウギに入れて、あまり冷まさないうちにさしたが、マユダマ木を適当にノコギリでつめて飾った。

六、飾りかえ、供え方

十三日に飾りかえを行っている。大正の頃は、十四日のドンドンヤキを済ましてからするのが一般的であった。

(一) ハナの供え方

ノシバナは、一軒で一つだけ作った。チャノマの入口の外側中央、吊るして飾りつけた。以前九尺ほどもあるノシバナを作ったこともある。

ヨリバナは、ダンゴやおシラ様のところへつけて飾られた。タバリバナは、タバリジメをしたところへそれぞれ供えられた。諏訪神社、十二様、天神様、琴平様、董影山、墓地や石塔などである。

(二) 道祖神の祀り方

ドンドンヤキは、正月十四日の朝行われていたが、昨年から十五日朝となった。子供たちが、マツ・タケ・シメ・ムギワラ等をひき

集めていたが(写真106)、今では個人で持っていていっている。吉平甲のエダミチにドウロタジンバがある。

ドンドヤキの火の中へ、厄年の人がその年齢に因んだ数の金銭を投げ入れて厄落しをする。全部燃え尽きてから、子供たちが炭や灰の黒い中からこの硬貨を拾った。

(三) まゆだまの供え方・飾り方
ミズキの木にダンゴをさしたものを供える。「ダンゴをならす」という。ミズキの梢頭の芽を適宜

折り取ってさしよいようにする。

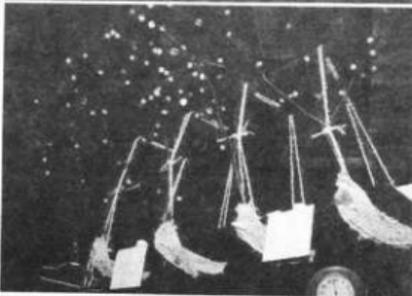
年神棚へ四本(写真107)、大神宮様、荒神様、仏壇、ダイドコロ、オキノデイ、ナカノマ、コザシキ、トボなどに各一本を飾りつける。

△写真108▽

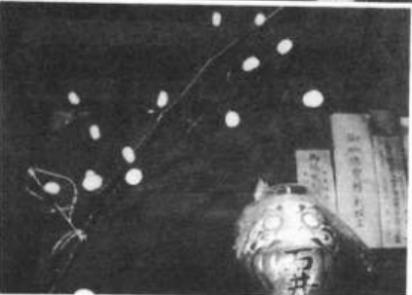
オシラ様へのマユダマ(写真109)は、楕円形のを十六個作るが、大振りのミズキのほか、ヤマツク



(写真105)



(写真107)



(写真109)



(写真106)



(写真108)

ワを使ってさして飾った人もいる。

ダンゴ以外には、すべてにカザリガシ（ハナガシ）やヨリバナをつけて飾った。カザリガシは、正月二日以降、売りに来た人がいた。マユ・カブ・コバンなどの形で、色も白、桃、黄、緑などで鮮やかだった。

七、小正月行事との係わり

(一) 年取り

正月六日と十四日の晩の年取りには、御馳走をして夜ふかしをする。早寝するとシラガになるという。

(二) ドンドヤキとつくりもの

ノシモチをカドマツに使ったタケの先へさし、ドウロクジンのところでこがして焼く。家へ持ち帰って食べるとカゼをひかないという。

(三) 十五日粥とつくりもの

カユカキ棒一本を持ち、まず先にかく。唱えことばは特にならない。その後、神棚へ立て掛けて上げておくが、後で燃してしまふ。

割り口のところへ焼き米を紙のおひねりにして挟み、カラス除けとして苗代の水口へ二本さしていた人もいた。カラスの焼き米といひ、カラスが苗代にきて荒らすのを焼き米をくれてますのだといひ。

アズキガユを食べる際、田植えの時に風が吹くので吹いて食べてはいけなさとされた。

ハラミ箸は、その後二本を十文字にしてワラで縛り、屋根裏へ放り投げられる。

(四) 十六日の行事とつくりもの

正月十六日を、オシラビマチと呼んでいる。油ものを使う日とされ「油始め」といひ、ケンチン汁などをつくる。

沼田の神明様へ参拝する習慣があった。

「餓鬼の首もゆるされる」という日。

成り木貢めはしない。蛇、ムカデ除けもしていない。

(五) 十八粥

十五日のアズキガユが残っていた場合にはしている。

Ⅵ まゆかき

「まゆかきの日」とは特にいってはいない。

小正月の供えもの・飾りもののかたづけは正月二十日の朝、飾りつけたものを取りはずすが、これを「コナシモノをする」という。お棚まで撤去する日とされるが、朝には雑煮をつくり、元日と同様に神仏へのお供えをする。

マユダマは、シウギなどの器に入れられる。

Ⅶ つくりものの最終的処分

ハナは、まとめておいて苗代のカカシにしたりしましたが、ダンゴの木などは、乾かして燃してしまった。

二月の初午には、ハツウマダンゴといってアソを入れたダンゴを作る。お供えとして、オハチに入れてオシラ様へ進ぜた。

初午の朝、大正月の年棚に使った四本のマツギワラのマブシを別にとっておき、炬で燃してケブリを上げる。クズヤの屋根にケブリが上がるのがよく見られた。

Ⅷ セッチンピナ

セッチンピナは、吉平で一軒、今井忠重氏宅で子供の頃見たのがそれだったという記憶がある。

(神宮善彦)

田村秀夫家のつくりもの

一、概観

月夜野町小川の小和知地区は、利根川右岸上牧温泉から西へ入った山間の地である。

△写真110▽

小正月のツクリモノについては、急速に消滅しようとしている現況にあるが、お宮や墓地などに、シメと同様にして供えられた多数のタバリバナを確認することができる。

また、ダンゴの木には、主にミズブサが用いられるが、オシラ様の十六マユ玉は、ザシキにカドマツのタケにさした状態で飾られている。終戦後までは、ダンゴ飾りにハナを付けていたが、現在では見ることができない。

二、山入り

元旦の早朝、年男が湯に入り朝祝いをしてから伐りに行っていた。半平氏（明治十五年生）が、よく御年始に出る前に伐っていた。二日が仕事始めたが、今はまちまちになっている。

二日の朝、タサカリナワ一と口半十二本を六ツオタ（一ダン）として、神棚へ吊るす。タサをマルクナワにしている。山は大峰山方面へ出掛けている。

初めて木を伐る時に、オサゴを持って行き、進めてくる。

暦をみて、最初にナタで切り込みを入れる始に、悪い方面を除いて、よい方向へ向かってノコで伐る。伐るのはオツカドの木で、ミズブサを使う人もいる。

そのままばらで担いでくる。

家へ持ち帰ってからは桶荷様の前の軒下へ置いておくが、特に供えものはしていない。



(写真110)

三、木の種類

つくりものに使用する木はお宮などへくばるハナをはじめ、つくりものに使う木として、オッカドの木を使う。

まゆだまをさす木、ダンゴの木には、ミズブサが使われる。

四、作る日、場所、道具

小正月のつくりものを作る日は特に呼び名はない。

正月七日過ぎのよい日に作る。

作る場所は、ドマで木を切り、エンの上や口のめぐりで作る。

道具にはハナカキナタ（全長二十・四cm、刃部三・五×八・五cm）△写真III▽を用いるが、上牧の高柳鍛冶屋で作ったものである。

台は特になし。

作ったものは何に入れておくものも特になし。

つくりものは年神棚へのせておく。アワボヒエボ、ハシなどは、ワラニ・三本でマルクようにした。

五、作り方

(一) ハナの作り方（タバリバナ）

オッカドの木をノコギリで切り、ナタで四ツ割りにしていく。元の部分の皮をしるしに残しておく。ハナカキナタで削る△写真112▽

ダンゴの木にさしたハナも同様にした。

(二) カユカキ棒の作り方

ノコギリでオッカドの木を切り、ナタで尖らせる。先端はナタで十文字に割り、モチを



(写真 112)



(写真 111)

薄くしたものを二枚挟む。そして、ハナカキナタでハナをかく。

③ ハラミバシの作り方

オツカドの木を四ツ割りにし、その後、ナタで除々に割り続ける。ハナカキナタで削りのハナをつける。ハシは半端をこしらえるものだといひ、家族の数より一膳半余分に作られた。

④ 肥庭かざりの作り方

オツカドの木で、ナタで皮を剥いたアワボと皮を剥かないヒエボとを各八本ずつ作り、ハナをかく。それらを混ぜて、ワラで真中一か所を一回ほどマルく。

⑤ まゆだまの作り方

ダンゴといひ、ダンゴ正月と呼んでいる。

米の粉を使うが、十二様へのマユダマは、米と糠とを混ぜたものを使った。

ヤマタワの木の根から切った大きなものを用いたりもした。

粉は、「若びき」といって、正月二日に石臼でひいたが、頼んでひいてももらったりもした。水車は、昭和初期には共同で七つほどあった。

オシラ様のものだけは形が異なっていた。

ダンゴの木は、そのまま使えるように切っておくが、ダンゴはフカシでそのまま持っていてさしている。ツヤがあるが、今は蒸したものを使う。

六、飾りかえ、供え方

飾りかえは十二日か十三日に、オマツを取った代わりに飾りかえを行った。長いオマツグイの中ほどに、オマツを丸めたナワ二本でハナを付けた。

① ハナの供え方

タバリバナは、熊野神社などお宮や墓地に立て掛けたりして供えられた。△写真113・114・115▽ 長さも適宜作られている。ダンゴへさ

したハナをオマツグイにさしていた。

終戦後、ダンゴに付けていたハナをはじめとするハナ作りはやめてしまった。

□ 道祖神の祀り方

正月十四日朝、厄年の人がミカンや菓子をくばったが、去年から十五日となった。

五、六年前まではドンドヤキの小屋を作ったこともある。オマツ、オシメ、オフロダなど、個人で持っていくが、今は、お宮の前のドウロクジンバで行っている。

□ 肥庭かざりの供え方

今は特にやっているのはきかない。

神棚へ、木の皮を剥いたもの（米）、剥かないもの（雑穀）とを八本ずつ供えていた。



(写真113)



(写真114)



コエニワカザリも、ウマヤゴエに出していた。
四 まゆだまの供え方・飾り方

年神様のタナ、ハッショウ神など、ミズブサの若木の三蓋のところにさしたりする。

△写真116▽

ダイドコロからチャノマへ入るところのオシラ様や年神様のタナ(二つ)をはじめ、大神宮様、仏様、十二様、荒神様、オイベス様、稲荷様などへ一つずつ供えた。△写真117▽
また、ハナを作っていた時は、ハナだけをマフのあったところ△写真118▽や、釜神様、オヒガミ様、井戸などへも供えた。

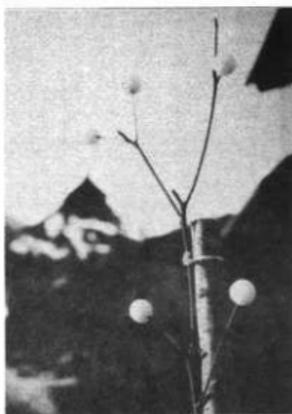
オシラサマ(釜神様)

の十六マユダマは、ザシキにカドマツのタケを置いて、そこへ米の粉のマユダマをさしている。△写真119▽

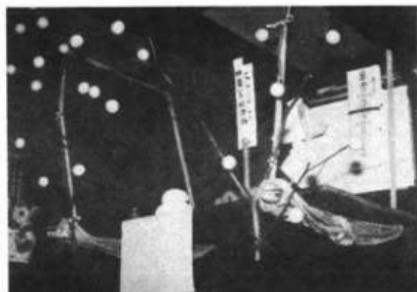
正月二日頃、タネガ

ミヤマユダマの形をしたハナガシを行商の人が

が売りにきていた。(別の人が、荒神様へのオンドリの絵を売りに来ていたこともあった。)



(写真118)



(写真116)



(写真119)



(写真117)

七、小正月行事との係わり

(一) オシラマチ

オシラミマチという。正月十四日、わざわざ山へ行き、クワの木の枯れたものを切ってチャノマのイロロリで一晩中燃していた。早寝をするとしラガになると初午の宵にはいう。

(二) ドンドヤキ

マツを焼いたものをユキでよく消して、屋根の上に投げ上げたり、カドへ吊るすと火事にあわなとか魔除けになるといった。

十四日の朝ドンドヤキでモチを焼いて食べるとカゼをひかないという。マユダマは焼かない。

(三) 十五日粥とつくりもの

オカユの中を苗代に見立て、カユカキ棒でならして十文字を入れる。二回くり返す。

唱えことばは特にないが、後に、年神様のタナの上から、タナが取れる時に神棚の方へうつす。

カラスが苗代につかないようにと、苗代をこしらえた時に、水のかけ口にカユカキ棒を立てた。ハラミ箸も、二本を十文字にして、屋根へ投げ上げたりした。

「一月十四日に風が吹くと秋の稲穂が出た時に風が吹く」といい、オカユを食べる時には吹いてはいけないとされた。「種蒔きの時、稲の花のさいた時に風が吹く。」ともいう。

(四) 十六日の行事とつくりもの

「饑鬼の首もゆるされる」という日。

馬のタツを二つ作り、馬屋神様(ダイドコロの奥の馬屋入り口の柱)に吊るしていたことがあった。昭和二十年頃まで、初めての申の日にカドマツのまわりを二回馬を曳き、それぞれ8の字に家の方へ入るようになって、その後コエダシをした。

用があったら、ひとかきでもコエを出した方がよいといった。

(五) 蛇・ムカデ除け

十二か十三日に、ジフク(家の土台まわり)の根元にヤカンでマユダマのうで湯をまいた。うで湯は魔除けになるといい、ヘビが緑の下に入らないともいう。

ダンゴを小袋を作って中に入れ、へビ除けのお守りとした。

四 十八粥

昭和初期まで、十五日のカユを十八日に温めて食べた。

(十五日のアスキガユにドンドヤキのハイを混ぜてまいたりした)

伍 まゆかき

二十日正月にマユカキをするが、「コナシモン」といっている。

シ・ウギなどにマユダマを入れるが、コバガイザルに入れた人もいた。ゆでて、しょうゆで食べた。

四 小正月の供えもの・飾りもののかたづけ

マユダマ木などは、マルいておいて、稲荷様のところへ置いておく。

つくりものの最終的処分は、カマドでまとめて燃してしまふ。

二月初午の朝、年神様のタナに上げたマツなどをチャノマのイロリでいぶした。

四 セツチンビナ

小和知の石坂正雄氏宅で、かや氏が、また、石坂貞三氏宅でも作っているという。

ペンジの神様のことをオヒガミ様といっている。

山田利治家のつくりもの

一、概 観

関越自動車道を水上インターへ写真120Vで下り、すぐに大峰神社際の道を西へ登ると寺間地区へ写真121Vに到達する。月夜野町との境を接する位置にあるが、冬期、スキー場への季節労働が盛んなことも、この地域の状況をよく表している。

オンラ様のマユ玉には、カドマツとした竹が用いられるところに特色があり、十六のマユ玉をさし、チャノマの北西隅に飾られている。

交通の高速化とともに、小正月のツタリモノも加速度的に縮少されようとしているのが現状といえよう。

二、山 入 り

正月二日の「仕事始め」に山入りをする。

山は吾妻耶山方面へ、早朝一人で木を伐りに行く。雪のある時は、ホワイトバレーのスキー場方面へ行くこともある。

供えもの、御幣、祀り方など、特に決められたものはない。

ナタ、ノコギリの他、ダンゴの木を伐る際のセンチバサミなどの道具を用い、新しい枝の部分を取ってくる。

伐り方には、特に制約はない。

運び方も、特に決まったことはないが、適宜束ねて運んでくる。

家へ持ち帰ってからは小屋の中へ置いておく。特に供えものはない。



(写真 121)



(写真 120)

三、木の種類

ハナには、オッカド(ヌルデ)の木が使われている。

まゆだまをさす木は「ダンゴの木」がよく使われるが、オシラ様(蚕の神)には、カドマツに用いた竹の枝が使われる。その他の木としては、ケエカキ樺やハラミ薯の木にもオッカドが、昭和三十二、三年頃まで使われていた。

四、作る日、場所、道具

小正月のつくりものを作る日をハナカキなどといっている。

その日は正月十日から十二日頃の、よい日を選んで行っている。

作る場所はザシキのユルリなどで作っていた。

道具は上牧の高柳鍛冶屋で作ってもらったハナカキ(全長十六・二cm、刃部一・六×五・七cm)ハ写真122Vを使っているが、ナタを用いる人も多い。

台は特になし。

つくりものを置いておくところは、新聞紙などにのせ、年神棚に置いておく。

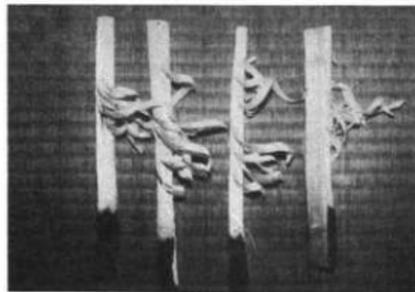
五、作り方

(一) ハナの作り方(カキバナ)

土間に木の台を置き、ナタでオッカドの木を割る。ナタで皮を剥いた後、ハナカキを用い、木をひざにかけ、手前に削っていくとカキバナが作れる。ハ写真123V全長約二十cm、幅約二cmほどのハナとなるハ写真124V。



(写真 123)



(写真 124)

(写真 122)



(二) カユカキ様の作り方

先端には十文字に切り込みを入れる。削りはつけていない。

(三) ハラミバシの作り方

家族の人数分だけ作られる。単位はゼン(膳)。

(四) 肥庭かざりの作り方

アワボヒエボは小仁田ではあるが、ここでは作っていない。

(五) まゆだまの作り方

ダンゴといい、ダンゴ正月とは呼ばれる。オシラ様(董神)

のものだけは、マユダマとっている。

粉には、昔から米の粉が使われてきた。

十二日に、米を洗ってからついた。月夜野の高日向で粉をひいた。寺間には、水車が三

か所ほどあり、昭和三十五年頃までひいていた。小仁田では、ベッタリと呼んでいた。

ダンゴは、十二日には作られた。オシラ様(董神)へのマユダマだけは、手の指のハラ

で中央にくぼみをつけたマユ形のものだった。

ダンゴは、ミズブサの木にさし、タケのツツに入れ、年神様などのところに結わえる。

オシメのナワを用いて二か所で縛る。

六、飾りかえ

「飾りかえ」は十三日に行われる。

(一) ハナの供え方

カキバナは、年神様(棚)、仏様、オイナリ様、神棚、お墓、ドウロクジン、釜神様、

井戸神様などへお供えする。△写真125▽



(写真125)



(写真126)

ダンゴの木をお供えしたところへ、同様にしてお供えしている。△写真126▽

□ まゆだまの供え方・飾り方

ダンゴの木に五個ずつのダンゴをつけ、年神様(2)、仏様(1)、オイナリ様(1)、神棚(3)へタケツツに入れ、ダンゴも余計に八個くらいつける。お墓(1)、ドウロクジン(1)。(ここだけは十四日の朝供える)のようにそれぞれへお供えする△写真127▽。

オシラ様(蛭神)へは、カドマツにしたタケのウラ(下)を切り、先をそろえて十六個のマユ形のマユダマをチャノマの北西の隅に飾りつける。△写真128▽マユ形は、指の両方のハラでおさえるようにして作る。

七、小正月の行事との関わり

□ オシラマチとつくりもの

(「オシラミマチ」といい、十四日の夜は早寝をするとシラガになるといわれた。)

□ ドンドヤキとつくりもの

ドンドヤキのオマツを十三日の午後、子供たちが「堂の前」へ集めてよせる。△写真129▽切りモチをタケの先につけ、焼いて食べるとカゼをひかないという。マツのシミツカケを拾って家へ持ち帰り、軒の隅へ吊るして火伏せにする。

ドンドヤキの際、火の燃えている中に、厄年の人がお金をオサゴと一緒にオヒネリ



(写真127)



(写真129)



(写真128)

に入れて拝む。燃えきった後、子供たちがそれをかき出した。「お金は、その日のうちに使うものだ」といわれた。

㊦ 十五日粥

正月十五日の朝、小豆粥を作り、カユカキ棒二本を両手で回しながらならし、最後に十文字にする。唱えことばは特にない。その後神棚の東の方へ上げておくが、あとで燃してしまう。

ハラミ箸も乾かしてから燃してしまいが、煮物とか炒め物をする際に用いたりもした。田や畑にたてるようなことはなかった。

㊧ 十六日の行事

小正月と盆の十六日には、夜にゴハンとケンチン汁を仏様だけには供えている。

十六日の墓参りは特にしていない。

成り木責めはしていない。

(旧十月十日には十日夜のワラデッポウの行事があったが、ワラデッポウを使った後、柿の木などに吊るしておくときよく実がなるといわれた。)

蛇・ムカデ除けもしない。

㊨ 十八粥

十五日に作ったカユを残しておき、少しずつ食べた。

㊩ まゆかき

正月二十日をまゆかきの日としている。

オイベスコウで「オタナがおるる」ともい、ショウギにマユダマを入れ、ゆでてさとうじょうゆで食べた。

ハナなどはさげて、燃してしまつた。

小正月の供えもの・飾りもののかたづけは正月二十日の朝飯前、お茶を進せてからかたづける。さげたものをまたいではいけないとされた。

つくりものの最終的処分は、カキバナなどは、乾いてから燃したりして処分してしまう。

二月初午には、進ぜたマツなどをユルリでいぶしたりもした。

(註) オヘーナ

月夜野町小和知の石坂貞三氏（山田氏の妻きん氏の兄）宅で、重乃氏が、きゅう氏の教えを受けオヘーナを作っている。着物は半紙で、マゲなどは別の紙を用いて「ロメサン」と「ムコサン」を作るといふ。ムコサンにロメサンをおふせ、ミスヒキで結び付ける。正月十四日の夜、女性が作るものとされる。その後、チョウチンを持って便所のタナに吊るしてくる。毎年のものがたまつてくると、正月十四日朝のドンドヤキの際に燃やすという。

（神宮善彦）

阿部隆家のつくりもの

一、概観

奥利根・藤原の入口にある栗沢地区周辺は、近年、民宿とリゾートの地として開発の進められている土地柄である（写真130）。

小正月行事については、比較的良好に継承されており、ツクリモノも多様なものが残されている。その中で、道祖神像等にたくさんに供えられたクルミの木のタバリバナは、ヤマナタなどで削られるが、同種のものでありながら、各製作者の意匠がそれぞれに表現されている。ドッコイと呼ばれる木刀、コメ俵・ムギ俵を表したタワラガマス、神棚等に供えられたクルミの木の新芽など、地域的なツクリモノの特性を十分に見て取ることができる。オシラ様の十六マユ玉は、アズキを一粒入れ、蛋のサナギに見立てて作られたという。

二、山入り

「山入り」の日は年が明けて、天気の良い、日のよい日に「若木迎え」をしている。

「キリヅメ」は、日が悪くなければ、だいたい二日に行うが、一日でも早い方が雪が少ないのでよいとされる。

十年くらい前までは、藤原方面への途中、共有林の千沢へ出掛けていた。現在は、家の裏近くの背戸へ行っている。

山入りには半紙に包んだオサゴを供え物としている。余ったものは、米櫃をあけて混ぜる。神様へ進せた米なので、粗末にしないという。

午前中に、ナタとナワ、コシノコなどを使用して伐り、背中に担いで持ってくる。

五十年前前には、山仕事をしていたので、その年の恵方を木を伐る方向として決めていたという。

伐る木は、ナラの木をはじめ、ミズブサやタルミなどで、近所に植えた人ののをもってきてきたりもした。ノコズリで、シンズエ（新枝）のいいところを使ったが、一本の木で、メの部分、ドッコイ、ハラミ箸、ハナ（元の部分）と各部分を使い分けられる木を伐ってきた。



(写真130)

ワラで束ね、背中に担いで、だいたい一人で持ってきていた。

家へ持ち帰ってからの扱いは、ワラで縛った束のまま、家の脇の燃し木の積んである上に置いた。

マツの時には、オサゴをマスで持っていて進ませてくるが、小正月の木の場合は、供えものは特にしない。

三、木の種類

つくりものに使用する木はタバタバナをはじめ、ハラミ箸、ドッコイ、ケエカヤ樺、タワラガマス等のつくりものには、クルミの木が使われることが多かった。

まゆだまをさす木は、大神宮様、十二山神、年神棚（以前）、三本荒神、釜神様等への「ダンゴカザリ」には、ミズブサの木を使った。オシラ様の木に、くびれのある十六マユダマをさした。中にアズキを一粒入れ、蛋のサナギを見立てて作った。五、六年前までのことである。

四、作る日、場所、道具

小正月のつくりものを作る日には特に呼び名はない。正月十三日に行っている。

作る場所はダイドコロで作っている。

道具にはヤマナタ（全長三八・八cm、刃部四・六×二十一・〇cm）やコガタナ（全長十五・七cm、刃部一・九×六・五cm）を使うが、スギの皮剥きを使ったこともある。ハナカキを用いる人もあった。

台には、ケヤキの木のケズリ台（二十九・二×四十六・八×四・八cm）（写真131）を使っている。

作ったものはシ・ウギなどに入れておいたが、今は、机の上に置いている。つくりものはダイドコロの奥に置いている。



（写真131）

五、作り方

(一) ハナの作り方(タバリバナ)

クルミの木をノコギリ(全長五十・三cm、刃部四・〇×三八・五cm)でタマ切り、ナタで一本を八分くらいに割る。そこへヤマナタで、八〜十段ほどの削りを入れる(写真132)。

(二) カユカキ棒の作り方

まず一度ハナをかいて、その後十文字に割り、先を尖らす。アタマにはダンゴを挟む。

(写真133)。

タワラガマスを作っていた際には、それを立てた状態にし、その上にカユカキ棒をのせてさすようにした。

(三) ハラミバシの作り方

家族の数だけを作る(写真134)。単位は、セン(膳)

(九月八日の秋祭りには、ススキを神棚へ供えるが、その朝には、カヤ、ススキの元の部分でハシを作り、赤飯を食べたことがある。)

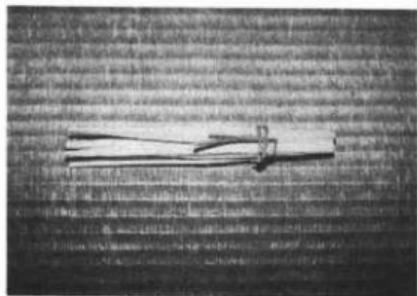
四 福俵

クルミの木でタワラガマスを作っていたことがある。木の皮を剥いたもの、剥かないもの各四本を作り、ダイドコロの隅に置いた。特に文字は書かない。三か所をワラナワで縛る。

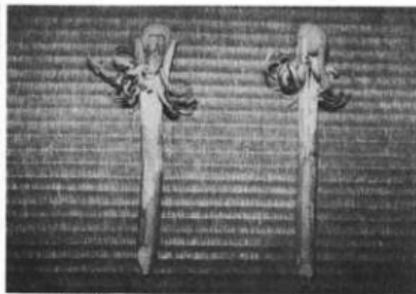
陶家の阿部寛氏宅では、現在も作られている。全長三十五・〇cm、ハナ全長三十一・三



(写真132)



(写真134)



(写真133)

cm 八写真135 V。

(四) 肥庭かざりの作り方

ダンゴの木に、クルミの木(長さ十一・二cm、径一・一・五cmほどのもの)の皮を剥いたもの、剥かないものをダンゴの間にさし、アーボヒーボとしていた。クルミの木のシンは通しやすいものだった。

(六) 木刀作りと、その作り方

「ドッコイ」と呼ばれる(八写真136 V)。クルミの木に刀のツバを付けたもの。小刀で刃の部分の皮を剥く。ツバの代わりに、廻り中にハナをかく人もいる。その家の男の子の数だけ作ったものだった。

正月十四日の晩、先にモチをつけて、ドンドヤキで焼く。ドッコイ(刀)も

半分くらいこがしてくるが、それをタズヤの軒下にかけておくとい伏せになるという。

(七) マユダマ

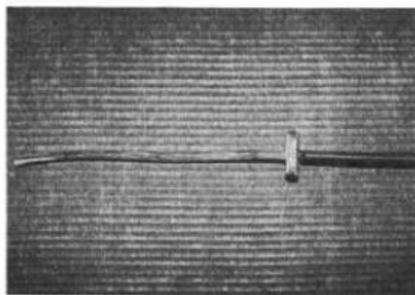
小正月のダンゴはまゆだまといわず一般にダンゴと呼び、小正月のことをダンゴ正月ともいう。

ダンゴカザリには、七草が過ぎた頃沼田から売りに来たハナガシもつけたりしていた。

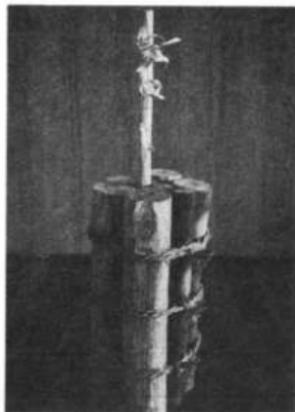
ダンゴは米の粉で作っているが、二、三十年ほど前まで、茶色っぽい稗の粉も使っていた。甘みのあるものだった。二十年ほど前までは水車が二か所もあり粉を挽いていた。その後は、粉を売りに来ていた。

作るのは十三日で、大きさは同じものだった。ショウギにあげてから、ミズブサのダンゴの木にさしていた。

六、飾りかえ、供え方



(写真136)



(写真135)

飾りかえは、十三日の午後で、マツのところにダンゴを飾りかえている。

(一) ハナの供え方

クルミの新芽のところを二本ずつ、オシラ様、大神宮様、十二山神、仏様などに供える(写真137)。ダンゴの木の数だけ、クルミの新芽も用意された。

ハナと一緒にダンゴを進げるのは、お墓、稲荷様、武尊神社などである。

タバリバナは、十四日にくぼるが、道祖神(写真138)や十二様などへ供えている。

便所へは、ハナだけを供える。

(二) 道祖神の祀り方

ドンドヤキの際、オサゴを供える。

正月十四日午後、粟沢公民館下の利根川近くの川原で行っている。今はそれぞれでマツを持ちよるが、昔は子供たちが集めていったものだった。

厄年の人が、厄オトシにドンドヤキに集まった人に御酒やミカンなどをふるまう。ドンドヤキの火にあたっている人にユキダマをぶつけてもよいとされ、いっばい当たると運がよいともいう。

(三) 福俵

タワラガマスと呼ぶが、三十cmほどのクルミの木をタワラにして三か所縛ったもの。コメ俵とムギ俵を表わし、オカッテに置かれた。

二、三年前まで作っていた。

(四) 木刀の供え方

ショウギやザルに入れておき、ドンドヤキの後、火伏せとしてクズヤの軒下にさして供える。



(写真138)



(写真137)

(四) まゆだまの供え方・飾り方

神棚などへは、棚にダンゴの木を縛って付けた(写真139)。ダンゴは二十個くらいにした。

オシラ様へのマユダマは、真中のくびれたもので十六個をミズブサの木にさして供えた。

七、小正月の行事との関わり

(一) オシラマチとつくりもの

オシラマチといっている。

十四日の晩は、コトシトリ(小正月のトシトリ)で、年越しのソバを食べる。

十四日の晩、ウドンやソバを小さいチャワンにもって食べる。神棚へも進せる。

オミタマサマの行事はない。

(二) 十五日粥とつくりもの

アズキガユの煮えたつところに、ケエカキ棒を一本ずつ先のダンゴでかきませ、煮えたカユをほぐす。唱えことばは特になし。その後、そのままワラガマスの上にもどしていった。

現在ではハラミ箸のみ使われている。使った後は、イロリで燃されるが、油をかきまわしたりするのにも使った。苗代へ持って行ったところもあるという。

(三) 成り木責め

正月十三日、ウメなど成りものの木にダンゴの湯をナベでかけると実がよくなるという。

(四) 十六日の行事

特になし

(四) 十八粥

十五日ガユを残しておいて、十八日に温めて食べた。



(写真 139)

Ⅵ まゆかき

正月二十日の朝、ダンゴを取り、シ・ウギなどに入れる。この日のことを「コナシモン」という。セツチンがミサマにあげたダンゴを、さげる時に食べると虫歯にならないともいう。

Ⅶ 小正月の供えもの・飾りもののかたづけ

正月二十日の朝行うが、早いほどよいという。遅くなると「コナシモンが遅れる」という。ダンゴは焼いて食べるが、年神様のダンゴを袋に入れて持っているといへば除けになるといふ。

Ⅷ つくりものの最終的処分

つくりものは、こまかくたたんで乾くまで置いておき、燃やされる。

福俵は三月の彼岸前、ミソマメを煮る時などにマキとして燃やしてしまふ。

補充

二月初午には特に使わないが、タワの木の枯れたものを見つけてきて、初午のダンゴをゆでるのに使っていた。

オシラ様に供えるマユダマは十六個を作りミズブサの木にさしてザシキのかどに飾られる。中には、一粒ずつアズキを入れたが、入れ過ぎるとタマンマユになるといった。一升マスにワラのマブシを入れ、その上に十六のマユダマを置き供えた家もあった。

（神宮善彦）

原沢一郎家のつくりもの

一、概観

原沢家は、利根川の支流赤谷川の左岸、国道十七号線に面した農家で、神棚のあるザシキは吹きぬけになっている。

ハナはオッカドの木を割って、上の方にケズリを入れてハナとする。長いハナは作らず、ニワトコの長い枝を皮つきのまま半紙に包み、水引きでしばって上げる。カユカキ棒、ハラミバシにはケズリが入られる。コエニワカザリは竹を割って曲げたものに8本（十六本もある）をさして作る。福俵は作らない。マユダマは大きいマユ形の十六マイダマには小豆を一粒ずつ入れてまるめている。十六日にはオソウゼン様に、めしとケンチン汁、おかずに着をそえたお膳を馬屋の前に供え、ロウソクを立てた。

二、ワカキムカエ

一月二日の仕事始めにワカキムカエをするが、いまは元日の午後行く人が多い。まわりの山のどこかへ行く（昔は恵方ということだったが近年はいわない）。山へ入る時は、魚（煮干し）、オサゴ、餅（ノシ餅を切る）を半紙に包んでゆき、木の根または木の又に運ぶ。高い所の木を切ると若木という（河川敷の方が赤いイイ木がある）。鉈と鋸を持って行って切ってくるが「他人の山へ入るのにノコギリを持って行くバカはない」ということをいわれる。松かざり用のお松や若木迎えだけは他人の山へ入っても文句をいわれないことになっている。ノコギリは太い木を切る用意だからこんなことばも出るわけである。切った木は担いで帰り、地面にはおかず、高い所へ置く。供えものはいらない。

ハナはオッカド（ニワトコ）は庭に植えておいて飾る時切ってくる）、マユダマの木はミズブサを使うが、オシラ様のマユダマは、門松に使った笹竹を使うことになっている。

三、つくりもの

つくりものを作る日は特にきまっておらず十三日のカザリカエに間に合わせるように作る。モノヅクリということはあまりいわない。イロリ端で、台には薪を使い、ハナカキナタを使う（写真140）。作ったものはショウギに入れる（川田の方では箕に入れて床の間にお

く)。そのあともものによっては神棚に上げる。

(一) ハナ

ヌルデの木を三十cmくらいの長さに切り、サカサを防ぐために印をつけてから二ツ割り又は四ツ割りにし、上の方に3本のケズリを入れる。ケズリは四本をきらい、七・五・三がよいとされている。長さはきまりはない。

△写真141▽ 長いハナは村の中に一人いたがその人が死亡してからは作る人はいない。いまは、長いハナは、ニワトコを切ってきて、皮をつけたまま半紙で包み、水引きをかけてしぼる。ニワトコは一年間でよく伸びることが大切にされる。

(二) カニカキ棒

オッカドの長さ三十cmくらいのものを、皮をむき、先をとがらせ、元を四ツ割りに割れめをつけ、ここに餅を入れる(昔はマユダマを入れた)。今年はしなかったが、いつもはケズリを入れることにしている。

(三) ハラミバン

中央部が太くなったオッカドの箸で、家族の人数分と一本の半端を作る。箸にもケズリを入れる。

四 コエニワカザリ

竹を割って八本、又は十六本を折り曲げ、これにオッカドの棒八本(八はひらくという)とか十六本を作って竹の先にさして作る。△写真142▽



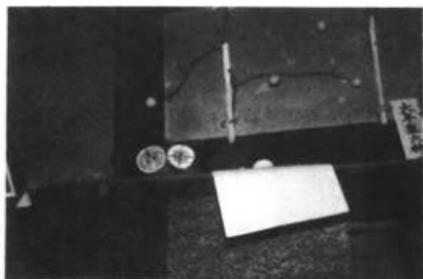
(写真140)



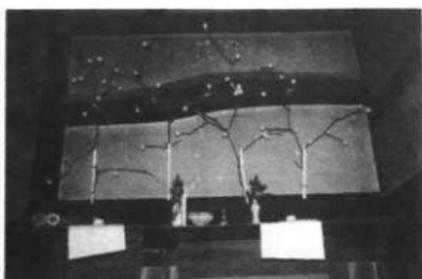
(写真142)



(写真141)



(写真 144)



(写真 143)

福俵、木刀、農道具は作らない。

(四) ダンゴ

マイダマともいうがダンゴという方が多い。一般のマユダマは丸形で、十六マイダマはマユ形に作る上に小豆を一粒ずつ入れて来た。サナギというわけらしいが、今年は入れてない。昔はいろいろな粉を使っただが、いまは米の粉だけで、年が明けてから粉挽きをした(ワカビキという)。十三日にこねてまるめてゆでる。ふかすこともある。

四、カザリカエ

カザリカエは十三日。ハナは、年神、デエドコ(台所)、オソウゼン様(馬屋神)、稲荷、便所、お寺、神社、十二様、お墓などへ上げる。年神棚には四本のハナをしばりつける。△写真143・144▽

コエニワカザリは、コエニワ

(堆肥)の上に立てる。新しい堆肥を積み上げることはない。五穀豊穡を願うものである。

マユダマは、ミズブサにさして、ハナを上げるところへはすべて上げることにしており、年神様には四本上げる。ザシキの隅にオシラ様の十六マイダマが上げられる。

△写真145▽



(写真 145)

門松に使った笹竹に、十六個のマニ形の大きいマユダマをさして供えるが、こ
の中には小豆を一粒ずつ入れる。〔写真146〕

五、小正月行事との関わり

(一) ドンドンヤキ

十四日夜、弁天様近くの川原に、お松やシメ飾りなどをつけて飯小屋のよう
な小さいものを作り、村人が集まったところで火をつけてあたる。火をつける
時には鈴を鳴らした。マイダマを焼いて食べたが、カゼをひかないといわれる。
男二十五・四十二才、女十九・三十三才の厄年の人は厄おとしとして、男は振
舞い酒、女性はミカンを配った。

川田地区（沼田市）では、厄年の人は年の数だけお金を投げこむことで厄お
としをした。このお金は子ども達が後で細りおこしてみつけたが、このまま家の中へ持ちこむなといわれ、その日のうちに使うのがよ
いといわれている。

(二) 十五日粥

十五日朝、年男が鍋でオカイ（粥）を煮て火からおろしてむらす時、カユカキ棒で、時計まわりに一回かきまわし、この中へ餅を欠
いて入れる。カユカキ棒の割れめに入ると縁起がよいという。この粥はハラミ箸で食べるわけだが、ひと箸、まねごとに食べるのに使
う。カユカキ棒はとっておいて苗代のヌルメの水口に二本立てる。

十五日粥は熱くても吹いて食うなといわれる。それは吹いて食うと田植に風が吹くといわれる。（川田地区では、苗代の種まきに風
が吹くという話である。）

(三) オソウゼン様

十六日に、オソウゼン様に上げるといいうのでめしとケンチン汁、おかずに箸をそえてお膳をつくって、馬小屋の前に出し、ロウソク
（灯明）を立てて供えた。



(写真146)

四 十八粥

十八日に十五日粥の残りを食うと、ハチにさせられないという。神仏には進ぜない。

(四) コナシッコト

二十日朝、マユダマをとる。コナシッコトといい、シウギや木鉢に入れた。マユダマは保存食として焼いて食べるほか、とって置いてバラバラになったものを粉と一緒にこねてヤキモチとして六月一日のキヌヌギに食べた。

ハナなどは二十日朝片づけるとすぐに燃した。

(六) その他

昔(三十年以上も前のこと)は、十二日か十三日に餅つきをして、餅を切って菱形として、マイダマと一緒にいくつかさした。(沼田市の川田地区では、ダンゴをささずに餅だけをさした家もあった。また藤尾地区では餅だけをさして飾る家の方が多いという。)門松は、芯松をさすがダンゴはささず、突っただのは(マイダマをさしたもの)家の中に飾るわけである。

(坂本英一)

富沢佳年家のつくりもの

一、概観

富沢家は、新治村の南部、大道峠の麓の奥平温泉に近い農家で、ハナはコモゴメ（ミツバアオイ）を使った一段のものを作る。十六バナはニワトコで二本、昔はハナをかいだが近年はハナをかかずに水引きでしぼるだけになっている。カヌカキ棒は一組、皮をむき、一か所ケズリをつけ、十文字に割れめをつける。ハラミバシも作って、十五日粥に使用する。コイニワカザリは近所の家では作る家があったが、富沢家では作らない。マユダマは米の粉、榊の粉（ヒエダマ）、粟の粉（アワダマ）、キビ粉（キビダマ）でつくったが、ヒエダマは落ちなかったが、他のマユダマはさしてもよく落ちるので、落ちる方が豊作になるといわれた。

二、山入り

二日の午前中に、暮のうちに見当をつけておいた山へ小正月のケズリバナの木と、ダンゴをさす木を切りに行く。御幣は持たないがキリモチを一組持って、八幡様の前にある十二様に上げて拜んでから山入りし、なたや鋸で切ってくる。オッカドは鋸で、ダンゴ木はなたで切るが、ダンゴ（メエダマ）の木はミズキ、オシラ様の木はヤマツクワ（ヤマボウシ）で、どちらの方向に向いても切ればよいということである。木は、なわ一本でしばって担いで来る。少なければ抱えて来る。蔵の南側、薪の上に置く。拜む木だから汚れないようにするわけである。

三、ハナカキ

十二日にする。この日は十二様のお祭りの日でヤマヤスミの日といわれて山仕事を休み、お飾りをしたり、餅をついたりして用意することになっていた。ハナカキナタでハナをかく。△写真147▽ 台には踏み台を使い、できたものはショウギに入れることが多い。これ



(写真147)

は近くにあるからというが、箕に入れるのがよいともいう。午前中に作って、その日のうちに飾る。

(一) ハナ

一段のものだけ作る。親のやったものを見よう見まねでやるようになり、根元の方から引くようにしてかき、ハナが丸くなればよすというもので、大きいものが家の中のもの、小さいものが墓地に配るもので、全部で五十本から六十本は作る。

十六バナは昔はニワトコで作ったが、その時は長いものを二本、それぞれ皮をむいて、ハナを何段もかいて上げた。近年は、皮つきのものを二本、水引きでしばって上げるだけになっている。東峯須川から舞婆子に来た人は七・五・三にかいたり、二段のものを作っている。また近所の人はオツカドの木を割って、ヒトカド4と5本かいて神仏に上げる例もある。△写真148▽

(二) カユカキ棒

オツカドの皮をむき、元の方を四ツに割って割れ目をつくり、一カ所ケズリをつける。

(三) ハラミバシ

オツカドを割って、中央を太くして作る。長さは手頃にする。

四 農道具

作らない。(苗場の話ということだったが)太平洋戦争前までは、子どもに臼と杵を作ってくれた。杵は、細いハナギに火箸で穴をあけ、臼はオツカドの木にオキをのせて吹いているとうまく搗れる。子ども数だけ(男の子にも女の子にも)作ってくれる。子ども達は庭の雪を搗いて遊んだ。

福俵、コエニワカザリは作らない。



(写真148)

四、マユダマ

マユダマの粉は、米が半分、ヒエ、アワ、キビもあった。トシメユ(暮)のうちは挽かず、七草すぎになってイヌス(石臼)で挽いた。ヒエダマ、アワダマ、キビダマといい、ヒエダマはモサモサしているが、枝にさしても落ちないが、米、アワ、キビはシミル(寒気がきびしくなる)と割れて落ちる。冬シミル(凍る)方が豊作だから落ちる方がよいともいう。年神様や座敷に飾るマユダマや、家の外に供えるものはミズキにさすが、オシラ様にはヤマツクワの枝に十六マイダマをさす。宝珠のようなものとヒョウタンのようなもの十六個で、細い方からさす。マユダマはふかすと桶に入れて粉をつけ(化粧粉)、さしよくしてからさす。マイダマ木は、さす前にさし方を考えてハナバサミで切る。ミズバサを剪定すると枝の上の方が切れるので、子どもたちはカギンコにしてひっぱりっこをするカギンコ遊びをしたもの。

五、カザリカエ

カザリカエは十二日、松やオシメを外したところへハナ、マイダマを供える。△写真149▽

ハナは、年神様や仏壇、えびす様、馬屋の神、ダイドコの神(ヨリツキ)、井戸やオシラ様など上げる。屋外の神仏(野天に祀られたもの)に配ってまわることをソラシヨにまわるといふ。だから五十本から六十本は作っておく。

△写真150・151▽

マイダマは、ハナを上げるとこ



(写真149)



(写真150)



(写真 151)

ろと同じところへ上げる。

六、小正月行事との関わり

㊦ ドンドンヤキ

三・四年前までは十四日夜、オナベ(夜なべ仕事)にドンドンヤキをしたが、現在は朝になってゐる。祭りの世話人が世話をして、松かざりなどを燃えやすいように人形を作り、村人が集まったところで燃やす。松だからよく燃えるものだが、よく燃えないと厄病が入るといって、しまいの人はきれいに燃して来る。モエツクジ(モエサシ)は魔除けという所もあるが当地ではない。ドンドンヤキの火でマユダマを焼いて来て蛇除けとする。だから家族数だけ持って行って焼いて来る。厄年の人は厄落としをする。男は二十五・四十二才、女は十九・三十三才で、男は酒を御地走し、女はみかんを配る。ここでは十三(女)十五(男)も加えるということはない。

㊧ オシラマチ

十四日夜にはしない。

二月初午の日に、一升ますにマユダマ(マユダ形に作る)を山盛りにして神棚に供える。これをオシラマチというが、空白をつくことはない。

㊨ 十五日粥

十五日朝、小豆粥を煮て、年とり男がカユカキ棒で粥をかきまわし、そのまま上げておいて、苗代の水口に立てる。粥はハラミパンで食べるが、熱くても吹いて食べてはいけないという。田植えに風が吹くという。ハラミパンは、もとはキンピラなどの煮物に使った。

㊩ ツトッコ

十六日に、ヒエを煮たものをツトッコに入れて、ケエドの入口に置いて来る。お正月様を送り出すという。ヒエは煮ないと生えるので煮る。センビキガユ(千匹粥)とはいわない。

四 十八粥

十五日粥の余りをあたたためて食うのを十八粥という。奥平でやっている。

六 コナシモン

二十日の朝の行事としてマユダマをとる。とったマユダマは桶（水桶）に入れておく。年神様のマユダマはとっておいて、巾着に入れて持ち歩くとマムシ除けになるという。（トリイレの時もコナシモンといっている）

ハナなどの飾りものも二十日朝片ずける。八幡様に持って行く人もいるが、カマドで燃している。シント（法印）もカマドで燃すのがよいといっている。

七 オヒガミ様

便所神をオヒガミ様といい、オヒガミ様の人形を作ることはないが、数年前から河合洪太郎さんの作った網り物を便所の中へ貼っておくようになっている。

本多憲作家のつくりもの

一、概観

本多家は、新治村でも湯宿温泉から南に入った比較的平坦で、広がりのあるこの地の本多イッケの中心の農家である。小正月のつくりものは、マメンプチの木十六バナと、一段のハナを作る。大きいのは家の神に、小さいのはタバリバナとして屋外の神仏や墓に供える。カユカキ棒、ハラミ箸、福俵をオッカドで作るが、コエニワカザリや農道具は作らない。しかし、隣り近所の家ではコエニワカザリを作って飾る家も多くみられる。マユダマは米、稗、粟の粉でつくり、粉本来の色のままとし、染めることはなかった。オシラ様(蚕神)に十六マユダマをあげるほかに、桑の葉とよぶ菱形に切った餅を十六枚、ミズブサの枝にさして供える。

二、ワカキ

二日朝、アサユワイ(朝食)をすませると近くの持ち山へ行く。ノシ餅を十cm角くらいの四角に切ったものをふた重ね、半紙に包んで持ってきてゆき、半紙は三つに切ってノボリにして、切る木につけて十二様(山の神)に供えてから切る。十二様の石宮にお参りしてオソナエを上げて拜んでから山に入る。

切る木は、ハナをかく木はマメンプチ、ケエカキボウの木がオッカド、マイダマの木はミズブサ(ヤマツタワは使わず)で、垂つるでしばって担いで来る。家の西の、薪の積んであるところへ立てかけておく。ワカキの時は供えものはない。(お松迎えの時は、一升餅に米を入れて供える)

三、ハナカキ

小正月の用意は、十日から十二日にやるもので、十三日のオカザリカエに間に合うように、都合のつく日にやる。作業する場所はダイドコ、もとは板の間でネコ(ムシロ)を敷いてあったところでやったが、いまは畳を敷いてあるイロリのそばでやる。(大正月のものはザシキでなえという)。昔からあるケズリ台を台とし、ハナカキナタでハナをかくと、ハンギリという桶に立ててザシキにおく。カユカキ棒、ハラミ箸は、作ると神棚に上げておく。

㊦ ハナ

マメブチという木の長いものでジュウロクをかく。一本八段で二本で十六バナにするが、各段とも、ハナの本数はきまりなく、にぎやかにになるとよい。一段のものはハナを長くかき、大きいものを家の神、小さいのは屋外の神仏や墓に上げる。タサリバナという名がある。ノシは作らない。

㊧ カユカキ棒

長さ一尺二寸(約三十六cm)ほど、杭状にして皮をむき、ケズリは一か所だけ、三本くらいにする。

㊨ ハラミバシ

長さは約八寸(二十四cm)ほど、家族の人数分に半端(ハシ)を一本作り、神様分は作らない。

㊩ 福俵

オツカドの木を適当な長さで(八寸くらい)、十六本用意し、八本は皮をむき、八本は皮をつけたままとし、合せて麻なわでしばったものがタワラである。木の上下をまちがわないように木口に消炭で印をつけてからやったものである。

㊪ 農道具

農道具の模型は作らないが、俵の上に、農具の長い柄をつけたものを立てて飾ることはやったことがある。

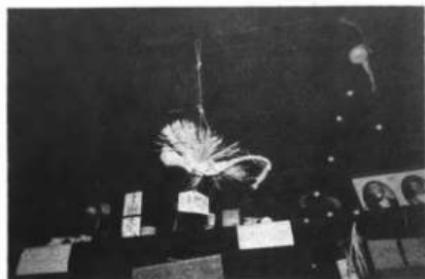
村の「たくみの里」に農道具のミニチュアを飾っているが、これはある人が吾妻の方から習って来て、近年になってから作っているもので、昔からこの土地にあった伝承ではない。

㊫ マユダマ

小正月のことをダンゴ正月というが、ダンゴとはいわずにマイダマという。粉は、米の粉は少く(すこく固くなる)、稗や粟の粉が多かった。これは、固くならず、米よりうまかったからでもある。小正月前にイヌス(石臼)で挽いた。ワカビキといった。作るのは十三日、神仏に供えたりするふつうのマユダマは丸い形のもの、オシラ様に上げるものはマニ形の大きいもの十六個を作った。

四、カザリカエ

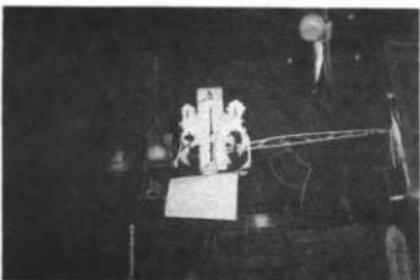
㊬ ハナ



(写真 152)



(写真 153)



(写真 154)

年神棚は、ザシキの神棚(写真152)の左側につくるもので、その前に三宝荒神とオシラ様を祀るので、キリハギと十六バナが上げられる。(写真153・154) 同じ側の縁側に近い方にも一本のハナ、その反対側にも向かい合うように二か所に一本ずつのハナを上げ、そのどれにもマユダマが上げられる。カマ神は、ダイドコの奥にある大釜の奥のカマ柱にキリハギが祀られ、そこにハナを上げる。(写真155) 井戸神には、七草の日に法印にキリハギを作って拜んでもらったところへハナを上げる。春祈禱はもとは一月六日に行われて、水神、荒神、十六様、ホクラ様(氏神)を拜んでもらって、年中被いの幣束してもらった。それらの所へはハナを上げ、墓地にも十六バナ一本とハナ、オソナエ(四角に切った餅)を上げた。(写真156)



(写真 155)



(写真 156)



(写真 157)



(写真 158)

マユダマは、ザシキやカマ神様などへ上げる。オシラ様には門松の笹竹の一本に十六個のマイダマをさしたものを上げ△写真157▽、桑の葉と称してミズブサの枝に、ノシ餅をひし形に切ったものを十六枚さして上げる。△写真158▽ 巫神様の供えものである。

五、小正月行事との関わり

(一) ドンドンヤキ

東峯須川が四組に分かれ、四か所でやる。小屋を作ることはなく、松かざりやシメナワを持ち寄って、積み上げて燃やすもので、昔から十四日にやっていたものを本年(六十二年)から十五日朝にやるようになった。

(二) オシラマチ

マブシバと称してソバをつくってオシラ様に上げる。他の神仏にはウドンを上げる。

オミタマ様という行事は聞いたこともない。

三 十五日粥

十五日朝、小豆粥をたき、カイバシラといってカユカキ棒の四ツ割りしたところへマイダマを二ツ割りしたものをさしこんで、小豆粥をかきまわして、割れめに粥がよく入れば豊年という。また水かげんで用水の多い少いも占う。カユカキ棒はとっておいて苗代づくりの時、水口に立てた。ハラミバシは小豆粥を食う時だけ使う。これはキンピラづくりには都合のいい箸だった。

四 十八粥

十五日粥の残りを十八日にあたためて食うことになっていた。

五 タナサガシ、マユカキ

マユダマは、二十日のタナサガシの朝とることになっていて、シ・ウギに入れてとる。(マユダマをさす時は、木鉢に入れてさす。化粧粉とかいう米の粉はつけない。ふかしたままでさす)

年神棚に飾った四本の松は、二階にとっておいて、初雷の時にイロロでいぶすと落雷がないという。ハナはゲヤ(下屋)の上の家人が入らぬ所において(きまった場所)、チヂレをむしりとして、春蚕のアゲカゴ(上簇かご)に印として使った。昔は蚕種を一種でなく何種類も掲立てたので、その区別に使ったわけである。(養蚕技術の未熟だった時代には、一種類だけの蚕種で全滅した経験があったので、何か所からの複数の蚕種を掲き立てて、何とか豊蚕を願った)

六、その他

一 初午

二月初午にはマユダマとやきもちをつくって供えた。マイダマは、小豆を煮たものをマユダマの芯に一粒ずつ入れてつくり(サナギというわけ)、曲げ物のお鉢にワラを折ってマブシとして入れ、その中にマユダマを入れてオシラ様に上げた。オシラ様といってもオスガタがあるわけでないので神棚へ上げる。ヤキモチは、米の粉、稗の粉、朝鮮びえの粉などいろいろだったが、あんこを入れてまるめると、ゆでたりふかしたりしておいて、食べる時ワタシ(鉄器)で焼いてから食べた。

河合の家の中には、その家の主人が、お膳を持って便所の中で食事をして来るといふ例があったが、いまはまねごとに行っている。

(二) ホトラ様（小池祭り）

東峯須川の本多マケ（同族）五軒は、十二日早朝「小池祭り」を行う。祭りの前々日（巳の日をさける）、ホトラの屋敷の北辰妙見の石祠（氏神といえる）の左右に、本家・分家の順にお飯屋を作る。お飯屋の材料はかやと粟の柱十二本と新わらで、この日、新わらで細いなわをなうと輪にしてイロリのカギ竹にかけてから家を出ることになっている。宵祭りには、その家から出たおじ、おばなど一族が招かれてにぎわう。翌早朝、赤飯、しとぎが用意され、お参りする。お飯屋の前で火を焚き、赤飯、シトギがワラットッコの上に盛られて供えられたあと、各家の赤飯が人々の間で交換され、お祝いがされる。ホトラ様には正月には松かざり、小正月にはハナが上げられる。

(三) 便所神

本多家ではセツチンビナとよぶ便所神の人形は作ることも飾ることもないが、近くの「大庄屋」と呼ばれる河合家では、毎年、小正月に紙の人形を作って便所の中へ飾っている。近年までは毎年ものを壁に貼ったので何組もにぎやかにみられた。男女一組の人形としようだった。

便所神は「オヒガミ神」といわれ、赤ん坊が生まれると三日目とか七日目に、オサゴを半紙でオヒネリにし、祖母に抱かれて、橋を渡らずに、向う三軒か四隣り、四軒の便所参りをした。「オヒガミ参りをさせてください」とかいて、オヒガミ様（箱で作ってある）へオヒネリを上げて拜んで行った。何がなんでも早くやるものだといひ、赤ん坊が丈夫になるといった。

林 幸男家のつくりもの

一、概 観

昭和村大字生越は旧赤城村（利根村）であったが昭和三十三年十一月に旧久呂保村と旧糸之瀬村が合併して昭和村が誕生し、その後、昭和三十六年八月一日に利根村より編入された。

生越は赤城山の北面で利根川の支流の片品川の河岸段丘の北端に位置している。戸数約七十戸であるが、その中四十戸ほどは林姓の同族である。古くより住みつき、農林業により生計をたてて来たが、現在はハウス栽培をはじめ新しい農業が盛んである。

交通関係は県道沼田赤城線が集落の中心をほぼ東西に通じている。

氏神は武尊神社があり、古くは赤城神社の氏子でもあった。氏神の境内には県下で唯一つのオシリ・ウサマの銘のある石祠がある。それには「死霊之氏神 享保八癸 卯九月十五日」と記されている。

小正月行事はほとんど消滅に近い状態であった。

このムラの林姓の家は餅なし正月で大正月には餅をつかなかった。なお、カボチャも作らない家例もあった。

大正月の三ヶ日間はソバ正月で、小正月には餅をついた。しかし、半々のつき混ぜで（アワとキミ）神様に供えるもののみ米の餅であった。

（平成元年は小正月行事一さい取り止めで写真、実物収集は不可能であった。）

二、山 入 り

若木迎えといひ正月二日に山入を行っていた。山は別に決っていなかった。その年の状況に応じ、材料の採取し易い場所ということであった。山での儀礼はオサゴを切る前に供える程度であった。

切る木はオッカド・ミズブサ・ニワトコ・ヤマタワ・白ザクラなどの木であった。このほか桑畑のタワの木であった。

若木は束ねて担いで来て倉の軒下に置いた。

山入りは年男が神様をおがんでから出掛けた。

持物は山の神（十二様）に供えるオサゴ、ナタ、ノコなど切る道具を持った。切る際はその年の恵方に向けて切り始めた。山タワは前年の中に見当をつけておかないと見つからないくらい少なくなかった。その代りに白ザトラを使うようになったが、これも現在は山になくなった。

三、木の種類

(一) つくりものに使用する木

オッカドの木を主に使用した。ハラミバシ、カユカキ樫を作った。

ニワトコの木で十六段のハナをかいて飾った。ヘイカキ樫を作っていた。これは畑に立てるものだとも聞いていた。大きさは八寸。

(二) マユダマをさす木

白ザトラ・クワ・ヤマタワの木を使用した。クワは大きい木を一本で、オシラ様へ供えた。白ザトラは正月様の神棚に、松を取って、すぐに飾るものとされていた。他所でいう、ヒキカザリということであった。

四、作る日、場所、道具

昔は山仕事が主であった。十二日は山に行き木を切らないことであった。山の神を祀る日などで、この日に、つくりものを行なった。つくるものはカユカキ樫、ハラミバシ、ヘイカキ樫、ハナなどであった。

ハラミバシは長さが八寸で、家族の人数分と神棚、仏だんの数に、ハシと呼んで一本を作った。十五日の粥を食べる際に使い、そのあとは細く削って一年中使用していた。特に焼もち作り、ソバツカキ、てんぶらあげなどに使っていた。

ヘイカキの長さも八寸と決っていた。

このほかカギバナ、粥カキ樫も作っていた。

粥カキ樫は小正月が終ると畑か、水田に立てた。別に決ったところはないが、家に近い畑に立てることが多かった。ものづくりの場所は特に決っていなかった。

道具は普段使用しているもので、ハナカキナタが特殊なものぐらいであった。

五、飾りかえ

正月十三日に行なった。

マユ玉の粉は十日頃、石臼で挽いた。昔はアワ、キミだったが、その後は米を使った。

この挽くことをセツキと呼んでいた。

水車で挽いた時代もあった。

マユ玉づくりは十三日で、餅挽きと平行して作った。オシラ様のものは一個が五勺もあるくびれのある甬型の大型で十六個作りタワの木にさして飾った。

門松に飾った一本の竹を使い、その枝の先に、皮つき、皮なしのオツカドを差して堆肥場（コイニワとかコヤシバと呼ぶ）の上に立てた。これは一年中そのままにしておいた。これは別に何サマという呼び方はなかった。

現在、白ザラは山にないので植えておいて使う。これは山タワの代りに使うものだった。神棚にこれはマユ玉をさして飾った。

ケズリバナは各神様、葛、屋敷稲荷などに一本ずつ飾った。ヘイカキ棒は煙に立てるものだった。

六、道祖神とドンド焼き

十四日の朝ドンドン焼きを行っていた。

この主催は、その年の厄年の人、四十二才の人が中心で行なわれた。厄年の人は厄落しに銭を火の中に投げ入れたり、みかんなどを出した。ここで餅を焼いて食べたり、焼え残りの松の炭を拾って帰り、自分の家の母屋の屋根と屋敷稲荷の屋根に投げ上げ、火伏せの呪いとした。

このムラには十三才の厄年ということは言わなかった。

昔はドンドン焼きの煙の流れによる占いがあったが細いことは不明。

道祖神は二ヶ所で氏神の境内と清水の三本辻であった。清水は石宮であった。

七、マユダマカキと

二十日正月の朝、マユ玉かきを行なった。この入れ物は竹シ・ウギに入れることが多く耕に入れることはあまり行なわなかった。この時の唱えことも占うこともなかった。

八、小正月行事とのかかわり

小正月のことをダンゴ正月と呼んでいた。

昔の物置小屋を取りこわすときに、屋根の茅の中から（ぐし裏のところ）小正月のつくりもののハラミバシが沢山出たが、その理由は不明だった。

つくりものの福俵、キジグルマの話は聞いていないが、セッチンピナはムラの中で見たことがあった。どこの家だかは不明。

小正月のマユダマを布の小袋に入れて腰に吊して山に行くときと蛇にかまれない呪いになるとされてきた。

初午との関係は、小正月のカキバナを集めておいて、初午に新しい五升、一斗、二斗入れなどの竹のザルを買って来て、その中の二斗ザルの中に、米の粉で作ったマユダマを入れ、その上にカキバナをマブシと称してのせた。

このザルは茶の間の神棚の前に供えた。その前にお酒なども供えた。

このマユダマは、その晩に食べることにしていた。

十八日粥の行事はあり、食べたり、神棚にも供えた。

小正月中に馬屋の肥出しを昔は行なっていた。

小正月のお供え餅は水餅にしておき再度神様に供えることがあった。それは、水餅を水につけておき、ふかして、臼で小麦粉を加えてついで、あんを入れた餅にして神棚に供えたがその日は不明。

小正月の十六日に墓参りをするとはなかった。

九、その他

小正月から二十日正月の間にオセンボウという行事があった。これは寺に寄って坊主の話聞くことであつたが、嫁・姑が仲良くするようにとの内容であつた。

成り木責めの行事としてはなかったが、柚の木に山刀で傷をつけることは実際に行なっていた。
オミタマサマということは聞かないが、オンラマチはあった。料理、その他のことは不明。
小正月がどうか不明であったが、昔、草刈りかごを逆さにして、そこに各種の農具を差して飾っていたところを幼い頃見た覚えがある。

（阿部 幸）

（注）林家については都合で平成元年の正月について聞きとり調査のみ行った。

小正月のつくりもの (三)

― 利根 編 ―

平成元年三月二十五日 印刷

平成元年三月三十一日 発行



編集 群馬県教育委員会文化財保護課

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一―一―

☎ 〇二七二―2311 内線四〇六一

印刷 有限会社 荒木印刷